東方學報　京都第九二冊（二〇一七）：七七-一三四頁

貴霜丘就却の歿年

桑山正進

はじめに
一　漢代の翕侯
二　「共稾漢使者有五翕侯」とかれらの占める位置
三　『後漢書』大月氏國傳の錯誤
四　丘就却の年代

はじめに

クシャーン朝の年代は普通貨幣碑銘資料に依って檢討され、これを漢文資料に依據しておこなうことは嘗てなかった。それをいま、とくに丘就却について行おうというのは、新資料の出現と舊資料の再檢討に照らすと可能だとおもうからである。その場合、貨幣學碑銘學の成果は先ずは伏せておき、それに無理にあて嵌めようとはせず、獨立して漢文資料を分析することにつとめる。漢文資料だけでは丘就却を考えるすべがないということか、從來誰もこれに顧慮しなかった。漢文資料はクシャーンにとっては外國が受け止めた情報で、間接資料であるからだが、それが必ずしも事實からかけ離れた

情報を受けているとも斷定はできず、例えばラバタク Rabatak 碑文のようなクシャーン自らが記したものであっても、それが自ら記したものであるが故に、かえって一歩下がって見る必要があり、内容が十割の眞實を陳べたものかは檢討を要する。漢文資料の内容がある程度のまとまりをもっていることは、多くは斷片的な貨幣碑文資料とは違った價値である。漢文資料上の丘就却情報は、特に貨幣のような斷片化した資料を組み立てて得られたわけではなく、資料として一貫、まとまっていて、それ自體情報量は少ないとはいえず、そのような漢文資料から丘就却を考えてこなかったのはむしろ怠慢であって、新資料が出現する以前にあっても、ここで檢討する手續きの大部分は可能であったはずである。新資料は舊資料という畫龍に點睛するだけである。

この百年來主として貨幣學碑銘學がクシャーン朝クジュラ=カドフィセス Kujula Kadphises の名を發見し、確定し、年代を設定し、さらに音韻學を援用して『後漢書』大月氏國傳上に記錄された丘就却をこれと同一視することに成功した。それはそれでいま問題がとりわけあるわけではない。[1] ところが西歐人である貨幣學者、碑銘學者たちは一様に漢文資料を直接讀解することに心許ないので、仍って漢文資料は關心ある一部の歐米の中國學者が歐米語に翻譯し、それを元に内容を知り、それに基づいて檢討することを餘儀なくされてきた。[2] 原典の翻譯には校訂と解釋がつきものである。解釋が分かれるところにはその解釋を採ったことに關する解說、注が必要である。現今大月氏貴霜に纏わる漢文獻を校訂することはないにしても、翻譯は解釋なしには成り立たないから、翻譯文だけに基づいて問題を整理して解答を讀み出す作業は、原資料の解釋を使って解釋することであり、多分隔靴搔痒の極みで、結果は推して知るべく、信じがたい。端的に言えば、『史記』大宛傳、『漢書』『後漢書』の西域傳など、資料の翻譯は、原資料そのものが傳える字面の狀況を完全に失っていて、資料の性格やその違いをわかりにくくする。『史記』になく『漢書』にあり、『漢書』になく『後漢書』にある記事が、例えばなんでも新出の情報にみえてしまうことにもなろう。『漢書』は『史記』に則った部分と『史記』にない新部分と

がある。『後漢書』は、『漢書』にない新情報をもっているが、『漢書』を節略し、證據なしに解釋した部分もある。それが翻譯では判じがたいから、『史記』以來の基本情報が曲解されることにも繋がる。[3]

丘就却の年代についてここに考え得る直接の資料は、『後漢書』大月氏國傳の「初月氏爲匈奴所滅。遂遷於大夏。分其國爲休密雙靡貴霜肸頓都密。凡五部翕侯。後百餘歲。貴霜翕侯丘就却攻滅四翕侯。自立爲王。國號貴霜。」である。この文のうち、「初月氏爲匈奴所滅。遂遷於大夏。」は『史記』大宛傳以來の情報に基づいたものであり、『後漢書』新出の、それだけで自立する、資料ではない。次の「分其國爲休密雙靡貴霜肸頓都密。凡五部翕侯。」も『漢書』大月氏國傳を元にしたもので、これだけで獨立した記事ではない。みな前書の踏襲である。『史記』大宛傳、『漢書』大月氏國傳との比較を得てはじめて活用しうる情報である。今日、いな百年以前から西歐では、貴霜は大月氏出自であって、大月氏貴霜同一説が原資料の誤讀の結果多數派を形成し、無批判的である。大月氏が行國、貴霜を大夏の土着とみて、土着が行國を征服する事態はありえないという觀念が先入的に存在するのであろうか。

「貴霜王が大夏種族であると主張するよりも、むしろ支那の根本史料によると、貴霜王を月氏種族と斷定すべき何等の確證が缺けて居る」と桑原隲藏はいった。[4]百餘年も前でも既に「大月氏貴霜同一説」が西歐では流通していたのを批判した桑原の正論はその後羽田亨が當然認めたが、言説は桑原と微妙に異なる。所論の要點は羽田自身の言を引くと次のとおりである。「所謂①五翕侯を月氏種族の建てたものと見るべき理由は無く、月氏の征服した大夏卽ちトクハリの國に於て、②月氏に征服せられるより以前からこれ等の翕侯が存し、後にその中の貴霜翕侯の勢力が增大して貴霜王家を建てることになったものと見なければならぬ。卽ち繰り返していふが貴霜王家は月氏種族ではなく、大夏種族の建てたものと解しなければならぬ筈である」（傍線は桑山）。[5]

「貴霜王家は月氏種族ではなく、大夏種族の建てたものと解しなければならぬ筈」だとする一方、傍線②「月氏に征服

せられるより以前からこれ等の翕侯が存し」たというのは「支那の根本史料」にはみえず、羽田自身の思考であろうが、その説明がない。桑原はそんなところまでは言ってはいない。翕侯は城郭の地である大夏に固有だというのであろう。羽田論文のフランス語譯によってポール=ペリオ Paul Pelliot は桑原、羽田説を知ったらしく、後に述べるように正しく五翕侯については理解した。[6] しかし大月氏貴霜同一説であった。次に、桑原にはじめ從っていた内田吟風は、羽田から四十年たったころ、同一説を成立させるにたる八つの證據というものを掲げて變身し、[7] その後江上波夫は内田の八證を排すどころかひとつの説として認め、桑原羽田等に反して結局同一説に組するために苦心する。[8]

クジュラ=カドフィセスはカニシカ Kaniška の曾祖父にして王朝の始祖とラバタク碑文に讀める。一方、『後漢書』は貴霜國の創始者は「丘就却」と記す。兩資料によって丘就却はクジュラ=カドフィセスである。外形上の對應とは別に、中古漢語で表記されるクシャーン最初の二王名をラバタク碑銘上の表記と言語學的に檢討するのがニコラス=スィムス-ウィリアムズ Nicholas Sims-Williams である。[9] 本論文はクジュラ=カドフィセスの年代を割り出すのであって、カニシカ紀元を議論するのではない。結論をいっておくなら、丘就却は西暦紀元三〇年より後のひとではありえないのである。となれば、カニシカ卽位年を二世紀とするには一世紀の間をどうするのかという問題が出てくる。カニシカ卽位年諸説のうち、ハリー=ファルク Harry Falk による最新説[10] 一二七年を三代前のクジュラ=カドフィセス三〇年死歿と繫げると、曾祖父歿年とカニシカ卽位年の間隔はほぼ百年。ラバタク碑文の王位繼承をこの百年間に求めると、ヴィーマ=タクトゥ Vima Taktu（?）とヴィーマ=カドフィセス Vima Kadphises といった二人の王が入らねばならない。名無し王である SOTER MEGAS（大救世主）が Vima Taktu に代わったとしても問題はさほど變わらない。カニシカ何歳の卽位かは不明であり、またクジュラ=カドフィセス高齡の死去を考慮したとき、百年に二人は現實的でなく、そうなれば、サカ紀元をカニシカ紀元としてジェラール=フュスマン Gérard Fussman らが唱導する七八年説がまだしも穩當なのである。[11]

クシャーン朝初期の編年を漢文資料を基に提示するには前提となる手續が必要である。[12] 以下の章立てはそのような手續に從っている。ペリオは五翕侯を正しく理解はしたが、大月氏貴霜同一説を採るから、まずは五翕侯が他所から來た大月氏であったか、大夏地方の人間であったかという問題をはっきりさせなければ、この古くて新しい問題は先ず以て解決しない。問題は、『漢書』大月氏國傳の五翕侯關係記事と『後漢書』大月氏國傳最後の一句との讀み違えでおきる。また、クシャーン卽ち大月氏人という結論に至る經緯には、資料の取り扱いもさることながら、先述のとおり、征服者である大月氏が次代の大勢力クシャーンに繫がるはずだとする先入觀があるようにもみえる。五翕侯は大夏の記事としてあらわれるから、大夏人であるとか、『漢書』大月氏國傳の大夏の說明は、それ自體大月氏國內の說明なのだから、五翕侯は大月氏人だとか、從來五翕侯をめぐる解釋はそのようなことばかりで、直接的拔本的檢討を欠いている。それに輪をかけたのが、丘就却が獨立したときのこととして『後漢書』大月氏國傳がいう、「周邊國は貴霜といったが、中國だけは昔のとおり大月氏と呼んだ」とあることに關する恣意的な受け止め方である。そんな意味で、先ず採り上げるべきは、漢代に使われていた翕侯とは何であったかではなかろうか。

一　漢代の翕侯

これまで漢代における「翕侯」自體を探った例しを聞かない。それを探らずして、「月氏の征服した大夏卽ちトクハリの國に於て、月氏に征服せられるより以前からこれ等の翕侯が存し」たと、羽田がいうのは不可解である。以下にまず翕侯に關する當面の檢討をのべる。明解はえられないが、ひとつの方向はみえる。

新版イスラーム百科でエドマンド=ボスワース C. E. Bosworth がいうように、翕侯が yaβγu に對應する中國語の音寫で

あるのはいうまでもないが、[13] ヘルムート=フムバハ Hermut Humbach の漢代漢語起源説は、スィムス-ウィリアムズが追隨しているけれども、それが匈奴を通じて各族に傳播したという、突飛な意見である。[14] フムバハ説の元になった事件は、匈奴の「小王」であった趙信というものが漢に投降して翕侯に封じられたことが出所であるらしい。匈奴になく、漢にもない翕侯 yabγu に封じられたとはなにごとであるのか。どこかに誤解があるとしか思えない。それは後に詳しくみるとして、翕侯の問題には、『漢書』大月氏國傳中の五の翕侯がまず取り上げられてきた。しかし大月氏ばかりが翕侯とかかわっていたわけではない。同時代の烏孫にも康居にもあった。大月氏も、烏孫も、康居もみな『漢書』にいう「行國」、遊牧國家である。この三つの行國以外に翕侯に關する記事はみあたらない。というより、この三つの行國に關係する記事に翕侯はあらわれる。とすると、翕侯とは、行國にかかわる役職、もっぱら遊牧國家がもっていた官職であって、土着國家側にオリジナルな官職ではないのではないかと豫想がつく。ところが、『漢書』西域傳のこういった行國の傳にみえる官職に關する記述には載っていない。各國傳の官職の項に記載された官職は、その行國の、つまりその國の人間に關わる官職なのが當然であって、ほかの國、行國でいえば、たとえば土着國（つまり被征服國）の人間が、行國側から授與されるものであるなら、そこに記錄すべきものではなかったのではないか。行國の性格としてそういった官職があった可能性はある。例えば、西突厥には頡利發 iltäbär があった。これは行國の人間が土着國へいって向側の行政に携わるのではく、行國が土着にそのような號を授けて統治させる、あるいは俟斤 irkin は行國の人間が向こうへ行って實際に徵稅を監督するものであった。翕侯號を授けられたのが、行國の人間か、城郭の王長であったかは、記錄に說明がない。しかしそのどちらかによって事は大きく變わる。上引の羽田が翕侯は大夏に以前から存在したといったが、烏孫國傳や康居國傳その他にも、翕侯が土着國家に固有であるとする證據はない。とすると、考えられるのはふたとおりであって、これを征服者行國大月氏と被征服者大夏の場合にあてるなら、大月氏人自身の中から貴霜翕侯が選任されたのなら、貴霜は大月氏の血脈

のひとであり、一方、翕侯號という稱號だけを大月氏支配者が被征服者貴霜以下に授けたのなら、大月氏と貴霜は血脈としては別個である。貴霜は大月氏移住時期に既に大夏にいた種族である。それが大夏に大昔から居たものか、これもまた大月氏より先に大夏に既に移住していたものかは、問わない。またこのことは漢文資料に情報は無く、見當もつかない問題である。

さて翕侯に關し『漢書西域傳補注』において徐松は、烏孫の翕侯の注ではじめて、「張騫傳に傅父布就翕侯とあって、翕侯とは烏孫の官名だと李奇はいう。このような例から烏孫に翕侯がいたことがわかる」といった。[15] つまり、烏孫では、「難兜靡［という名の支配者］が大月氏に攻め殺され、［大月氏に］土地を奪われたから、ひとびとは匈奴へと逃げこんだ。生後間もない難兜靡の子（獵驕靡、後に王となる。原文は昆莫とする。王の意味である。）は、守役の布就翕侯が抱いて逃げた。草叢に赤兒を置いて食べものを探して戻ってみると、狼が乳をやり、鳥が肉を銜えて、赤兒のまわりを翔んでいる。これはただごとではないと匈奴につれ歸る。單于はこの子を愛しみ育てた」。[16]

一方、顏師古はこの文の翕侯を「烏孫の大官の官號である。翕侯は數としてひとりではない。漢の將軍みたいなもの。布就とは翕侯中の別號で、右將軍左將軍のようなもので、人名ではない。」という。[17]『漢書』烏孫國傳の冒頭の說明では、烏孫には左右將軍がいるし、侯も三人いると。翕侯は翕侯であって、侯一字が翕侯を指すものではあるまい。侯は烏孫の貴族であろう。[18] 翕侯という行國の官職は漢文資料上には正式な說明がない。

烏孫にいた若呼翕侯というのはなにか。關聯記事から翕侯がどんなものだったかが少し判る。『漢書』烏孫國傳はいう。武帝末年か昭帝（前八六年―前七四年）のはじめごろ、烏孫を再興した昆莫から數えて二代目の軍須靡（烏孫王獵驕靡の太子）が死ぬと、伯父の後を翁歸靡（烏孫王獵驕靡の中子大祿の息子、漢は肥王と呼んだ）が嗣いだ。かれは軍須靡の妻であった公主解憂（楚王戊の孫女）を娶って三男二女をもうけた。この五人が成長したときに割り振られた役割をみると、[19] 王子王女には

遊牧國家の支配者一族として擔う役割があったようにみえる。長男元貴靡が世繼ぎであるのを措くと、次男萬年は一應莎車王になることはなった。[20] タクラマカン南道西の大オアシスの支配者である。いまのヤルカンド Yarkand あたりであり、當時ホタン Khotan を凌ぐ南道の大城市であった。三男大樂は要職左大將に任じられ、國政を直接荷なうが、烏孫の順位では大祿に次ぐ高位である。弟史と言う名の長女は嫁した先がクチャ Kucha 王であったから、これは北道最大の城郭の支配者と姻戚關係を結び、翁歸靡は外戚としてそれを牛耳りうる立場に立つ。クチャは屈强のオアシスで、後漢になってもなかなか漢に下らなかったが、當時は烏孫の勢力下にあったことがわかる。

ここで特に注意するのは若呼翕侯の妻となった次女である。三男二女の役割から行國烏孫の支配環境がみえる。烏孫王は當時、イッスィククル Issyk Kul 南西、クチャ北西、天山中の赤山城（赤谷城）に夏は居り、タクラマカン西半、すなわち南北道西半の要衝を王の子供たちを直接配置することによって押さえている。注意すべきは、烏孫王が息子たちに等しく與えた身分や役割の中に翕侯がないことである。王に最も近いひとたちではありながら、息子たちは翕侯にはなっていないのである。この點で、七世紀突厥の統葉護可汗が自身の稱號のうちに葉護の名をもち、またその息子肆葉護可汗がやはり葉護を稱號の內にとった例とは根本的に違う。統葉護が複數の葉護を統べるという意味をもっていたとしても、また、肆葉護が統葉護の後を繼がされたという意味の名號であったとしても。

ところが次女はなんと翕侯と婚姻しているではないか。他の兄姉たちの婚姻相手から推測すると、次女の相手の翕侯というものの身分も、顏師古が大官だというように、かなり上位であったと考えないわけにはいかない。それなら烏孫の將軍やほかの高官との婚姻があってもよさそうであるが、翕侯に次女は與えられた。長女がクチャ王に、次女が大官の若呼翕侯に嫁したのであれば、長女と同樣、次女もいずれかの要衝都市の王のもとに派遣され、行國土着國關係の繫がりのなかで役割を果たしたのではなかろうか。一應次男がヤルカンド王、長女がクチャ王の妻へとならば、烏孫はタクラマカン

西半を勢力下に抑えていたとみてよいのであろう。とすると、若呼翁侯とは、疎勒Suli、いまのカシュガルKashgharの支配者ではなかったか。要するにこの場合、烏孫の王子はともかくとして、王女が同種族の中での婚姻となれば、これは臣下との婚姻であって成り下がる。それは國家的に利用價値を下げることになって、ありえない。そうでなければ政略的對外的に使われたはずだ。『漢書』烏孫國冒頭に記載された官職は、その行國の人間に關する官職なのが當然であって、先にふれたように、ほかの國、例えば被征服國の人間が授與されるものなら、記録されることはないであろう。翁侯は行國に靡いた城郭の支配者に行國が與えた稱號で、これを以て行國は土着國を政治システムに組み込んだものと、私は考える。

上述の、布就翁侯と若呼翁侯のほかに、烏孫の翁侯例として次のようなものを例示しておく。「初、翁歸靡と匈奴女との間の子である烏就屠は、狂王（泥靡、軍須靡）が刀傷を受けたとき、驚いて諸翁侯とともに逃亡して、北山（天山）中に居ったが、母方の匈奴から兵が助けにやってくるなどと、大言壯語したから、衆人はこれに歸順した。のち遂に狂王を襲って殺し、自ら立って昆彌（王）となった。」[21] 烏孫には複數の翁侯がいて、王と親身に行動を共にしていた。

一方、翁侯は烏孫王（昆彌）とともに軍事にも關わった。漢の宣帝のはじめごろ（前七三年）に、昆彌は楚王の孫娘である公主解憂とともに上書し、匈奴の烏孫攻撃という國難を告げた。宣帝は五將軍兵十五萬をもって昆彌に應じる。「昆彌は自ら翁侯以下五萬騎を率いて西方より入った」[22]のである。また、時代が下った元延二（前一二）年、「時に大昆彌雌栗靡は雄健であったので、翁侯はみなこれに畏服し」[23]とあり、さらに注目すべきは、「これよりずっと後で、大昆彌の翁侯であった難栖は、小昆彌である末振將を殺し、末振將の兄安日の子である安犂靡を代わりに小昆彌にした」[24]とある。翁侯は威勢があったのか、このような程度のことまで行っている。

やはり烏孫國傳に、宣帝の元康二（前六四）年、昆彌翁歸靡が公主解憂との間にできた長男元貴靡を昆彌にするので、彼に公主が欲しいといってきた、という記事がある。結局公主解憂の弟のむすめ相失が行くことになるが、烏孫の方から

は、「昆彌（翁歸靡）、太子（元貴靡）、左右大將、都尉がそれぞれ使者を出して、總勢三百人以上となって漢に入り、若い公主をむかえにきた」という。[25] 烏孫に翁侯が複數いたことは確かであるが、布就翁侯のように太子の養育係をしたり、王とともに行動したり、軍旅に重要な役目をおい、また若呼翁侯のように王女を嫁にもらうほどの高位もいた。烏孫王の要事に翁侯は大いに關わっていた。だから、公主を迎えるような、舉國の大公事に、當然參加して使者を出してもよさそうである。それがそうでないのはなぜか。

烏孫國傳冒頭の官職説明を參照し、あるいは顔師古のように翁侯を將軍のようなものだとみても、烏孫には別にちゃんと「左右將軍」がいるし、「侯」も三人いることはさきに記した。翁侯は翁侯であって、翁侯を侯と省略しては呼ばない。それにも觸れた。翁侯は顔師古のいうように高位大官であったが、上例のような場合、烏孫國内の、烏孫自身に關わる事柄には、參畫していず、これに手をつけることはできなかったようである。翁侯に任ぜられた人間は烏孫王から翁侯號をもらって、烏孫王の内侍として直近で政務を補佐させられ、また戰役にも共に居たけれど、烏孫種族自身の要事には關われなかったと觀なければなるまい。そうすると、翁侯とは、官號こそ烏孫王から授かったけれども、烏孫の人間ではなく、行國が羈縻する中小の城郭の長としかおもえない。烏孫王の内侍に烏孫の豪姓を宛がうことは、かえって危險で避くべきであったとすれば、城郭の長を必要に應じて使い、それは行國が質子としての意味で城郭の長を留め置いたということにもなるのではあるまいか。

一方、康居の翁侯例は、『漢書』卷七〇陳湯傳と匈奴傳下に出てくるけれども、どうしたわけか、烏孫の翁侯のようにその名稱は知られず、翁侯という單語だけである。具體的なことはわかりにくい。陳湯傳に言う。郅支單于に牛耳られている康居を、西域都護甘延壽と副校尉陳湯が討伐しようとして上表したが、朝議久しく決らない。そこで劉向が上疏した。その文に、「（上略）西域都護延壽、副校尉湯、聖指を承けて神靈を恃み、百蠻の君をあつめくくって城郭の兵をからめ捕

り、百死に出でて絶域に入る。遂に康居を踏んで三重の城を滅ぼし、翕侯の旗を奪い、郅支[單于]の首を斬って萬里の外に懸け、威を昆山の西に揚げん。[26]（下略）」と。匈奴傳下では、「このとき康居王はしばしば烏孫に苦しめられていたので、諸翕侯と計った。匈奴は大國であり、烏孫ももとは匈奴に服していた。いま郅支單于は困窮して國外にいるから、迎えて[我が國の]東邊に置き、兵を合わせて烏孫を略取させ、彼をそこの王につかせてやれば、長らく匈奴の憂いはなくなるであろう。[27]」と。烏孫のような、某々翕侯などという呼稱はわからないが、康居にも複數の翕侯がいて、ことあるごとに康居王は翕侯と事に當ったようである。その點烏孫の場合とも同じであり、烏孫の翕侯が大昆彌直屬であったらしいのともよく似ている。

康居國傳の末尾、卽ち康居が抑えていた奄蔡の記事の次に、「康居有小王五。一曰蘇薤王。治蘇薤城。（中略）二曰附墨王。治附墨城。（中略）三曰窳匿王。治窳匿城。（中略）四曰罽王。治罽城。（中略）、五曰奥腱王。治奥腱城。（中略）凡五王屬康居。」とある。記事の配置や文章の構成において、大月氏國傳の五翕侯の場合と同巧である。白鳥庫吉は五王の所治を『魏書』西域傳所載の地理に基づいて特定している。[28]蘇薤城はシャフレ=サブズ Shahr-e Sabz、附墨城はクシャーニヤ Kushāniya、窳匿城はタシュケント Tashkent、罽城はボハラ Bokhara、奥腱城はヒヴァ Khiva 地方にあって、漢書風にいえばこれらは土着、つまり城郭である。サマルカンド Samarkand がソグド Sogd の眞ん中だとすれば、大體その周縁の城郭である。つまり行國康居の息のかかった城郭都市、これはソグドの都市であるが、そこに五の小王がいて、康居に服屬している、というのである。服屬する五小王は康居に支配された土着の五王である。これら小王が康居派遣の康居人なら、「凡五王屬康居」は不必要な記事であるから、そうではない。康居が土着の支配者に何らかの稱號を與えて支配に組み込んだのに違いない。康居の場合は五小王と記錄されたが、大月氏國傳の五翕侯は小長で、結局小王も小長も土着の支配者である。『魏書』が比定している『漢書』五翕侯の居場所と、これを基とする白鳥庫吉の同定をおおかた是と

すると、大夏の小長のなかで、東方の小長五人だけが漢使を接待したのである。かれらはたまたま翕侯だった。行國側からみた呼稱が翕侯で、小王（小長）は土着國側の呼稱ではなかったかとも考えられる。[29] 要するに、漢代の翕侯とは行國が土着に與える稱號であった。大月氏が稱號を授與し、授與されたのは大夏にいた小長で、大月氏のために働いたのであった。

ここで改めてフムバハ説を檢討しておく。『史記』匈奴傳、[30]『漢書』匈奴傳上に、[31] 元朔六年（前一二三年）夏四月の匈奴戰で、「漢はふたりの將軍と三千餘騎を失った。右將軍の蘇建は身をもって脱することができたが、前將軍翕侯趙信は兵に利あらず、匈奴に降った。[32]」とある。そこに注として「趙信とはもとは胡（匈奴）の小王で、漢に降ったもの、漢は翕侯に封じた。」と。[33] フムバハが翕侯の起源だとした漢の翕侯とはこれではあるまいか。『資治通鑑』漢紀一一によれば、司馬光は趙信が翕侯に封じられたのを元光四（前一三一）年一〇月とするから、趙信は漢にあること八年强で、匈奴に再び歸ったことになる。「單于は翕侯趙信を得て、尊重して自らの次位とし、自分の姉を娶らせ、一緒に漢對策を練った」という。[34]

漢が趙信に與えた翕侯號は匈奴を經て大月氏や烏孫や康居などに傳わったというのがフムバハである。それなら、翕侯號が漢の官制上どのような官で、どこに位置するのか、史料に説明があってもよさそうであるが、全然ない。そこでフムバハの當否を檢討すべく、ほかに趙信の記事を探すと、『漢書』卷五五衞青霍去病傳に、「趙信は匈奴の相國の身分で降伏した。武帝卽位一八年のとき前將軍となって匈奴と戰い、敗れて匈奴に降る。」とある。[35] 一方、『史記』卷二〇建元以來侯者年表第八によれば、[36] 元光四年七月壬午に翕侯邯鄲が不敬によって國を除かれたので、これに伴って、[37] 降服して漢にいた趙信が代わって「翕」に封ぜられることになった。四年後の元朔二年（前一二七）、かれは車騎將軍に隨って匈奴を擊ち、軍功により增封されるが、しかし、元朔六年（前一二三）、今度は匈奴に敗れて投降してしまった。これでは國を除かれて

も致し方ない。趙信に關する翕侯としての記錄はこれだけである。趙信は匈奴の翕侯であったわけではない。趙信は匈奴では相國（總理大臣）であった。漢に投降したあと漢はかれを翕國に封じた。『索隱』は『漢書』の表を引いて、「翕」とは內黃、河南省內黃縣である。趙信は漢の封建諸侯の一になったのである。となると、行國の翕侯とはまったくちがうものである。因みに行國で行われた翕侯は、例外なく布就翕侯、若呼翕侯、貴霜翕侯というように、翕侯は後置され、一方漢の諸侯は、翕侯趙信、翕侯邯鄲、侯趙信、侯邯鄲と公稱するように、前置されるのが常態であった。

フムバハ說の根據になった「翕侯趙信」の翕侯とは「翕國の侯」、漢帝國における封建諸侯の一であり、『漢書』の大月氏國や康居國や烏孫國諸傳にあらわれる行國の翕侯は、yaβγu の音寫語とみられる。兩者は偶然にも同じ漢字の組み合わせになっただけで、全く異なる。フムバハ說は信じがたい。誤解したフムバハに則ったスィムス-ウィリアムズは翕侯を「allied prince」と譯したが、それは yaβγu の譯であっても、lord of the Xi state とでも譯せる翕侯趙信の翕國の侯ではない。フムバハは、匈奴の相國であった趙信が投降して「翕國」の侯となったのを、漢がかれにヤブグたる「翕侯」を授けたと思い、中國起源と誤解したのであろう。フムバハはよって翕侯號が行國土着國に別なく存在していたと思っていたに違いない。それにしても、匈奴から他の行國へ官制として同時代にすばやく傳播し受容されたと、かれが考えた理由も判らない。趙信が翕國の侯に列せられたのは前一三一年であり、後述のように大月氏がアム上流域を征服して翕侯をおいたのは一三〇年代前半であるから、記錄に出現する翕侯は時間上大月氏がさきで、翕侯趙信があとである。[38] 一方匈奴に翕侯は確認できず、翕侯の中國起源說はフムバハの錯誤である。ところで大月氏はアム北岸移住以前から翕侯號を備えていたはずであるが、いつからそうであったかは判らない。

烏孫や康居の記事から、翕侯は王直屬ないし王直近の官位だろうと豫測した。後にのべる新出漢簡によれば、大月氏某々翕侯の名を取った大月氏配下の翕侯が、獨自に、あるいは大月氏自身とともに使者を漢に送り、實際に通交したこと

を傳えていることからも、翕侯の地位は行國の支配者にごく近い位置にあったはずである。翕侯という行國の稱號を通してみた場合、とりわけ大月氏や烏孫のように、行國と土着、遊牧國家と城郭國家は征服被征服の關係にはあったけれども、行國は翕侯を手がかりにして土着人を行國國政システムの中に組み込んでいたともいえるのではなかろうか。

漢代の翕侯とは別に、西突厥もヤブグ yaβγu を使った。唐はそれを葉護と音寫した。どちらも原語は yaβγu といわれる。しかし翕侯とは使い方が違っていた。六一九年ごろ、統葉護可汗は、チュー Chu 河域に本據をおいて、吐火羅 Tokhāra に進出し、クンドゥズ北方のアム南岸である活 *war に長男（咀度設 tardu šad）を居させた。『世界の諸疆域』*Ḥudūd al-ʿĀlam* に、「フルム Khulm はバルフ Balkh とトハーリスターン Tokhāristān の間」という記述があり、バルフとトハーリスターンとを區別していて、バルフ邊はトハーリスターンではなく、トハーリスターンはフルムより東であった印象を受ける。[39]『大唐大慈恩寺三藏法師傳』一〇卷（略稱慈恩傳）を參照すると、玄奘がインドへ向かった當時、長男 tardu šad は活にいた。[40] 玄奘の滯在中、六二八年九月ごろ、この長男の息子、卽ち統葉護可汗の孫が、父であるタルドゥシャド tardu šad を藥殺するという政變に遭った。簒奪者を『慈恩傳』は「新設」と呼んでいる。簒奪者が「設」なる官號をあらたにとったから、新設といったのか、「新 tardu šad（設）」とするところを略して「新設」といったのか、はっきりしない。新設である統葉護可汗の孫は玄奘の歸途に再出する。『慈恩傳』卷五に、「活國に至る。アム河の畔にある。すなわちトハーラの東部地域である。都城は河の南岸にある。よって［統］葉護可汗の孫たる王、トハーラ、自稱葉護にまみえた。」と。[41] 玄奘歸國途上六四三年の活國王は往路とおなじ［統］葉護可汗の孫であって、往路で新設、歸路には覩貨羅葉護（Tokhara の yaβγu＝トハーラヤブグ）となっている。六四一年にかれは咄陸可汗の攻擊を受けるが、六四五、六四八、六五〇年には吐火羅葉護の名で唐に朝貢した。唐朝では吐火羅葉護としてその名を公式に使っている。二年後、六五二年に、唐朝は活に都督府を設置し、月氏府とよんだ。そのとき吐火羅葉護は阿史那烏濕婆（あるいは阿史那烏涇婆）だったと

『冊府元龜』繼襲一にいう。六四五年には吐火羅葉護は朝貢した（『冊府元龜』朝貢三）。以後、「吐火羅葉護」は、ヒンドゥークシュ山脈北麓の主人公として、『通鑑』唐紀、『通典』邊防典、『唐會要』、『冊府元龜』外臣部に頻出する。[42] それらによれば、西突厥のトハーラ=ヤブグは、ヒンドゥークシュ山脈南部へ軍事行動こそ起こさなかったけれども、バーミヤーン Bāmiyān、カーピシー Kāpisī、ザーブリスターン Zābulistān までを廣範圍に管統する大勢力であった。このことを唐朝はよく知っていた。トハーラにおける西突厥系支配者の、このような記事によれば、七世紀西突厥支配下では、土着城郭の長が西突厥から葉護の稱號を受けていたのではなく、葉護を稱するのは、突厥中心部の最高位かそれにちかい有力者で、數はかなり限定されていたようで、有力な城郭の地に居住して直接支配した。西突厥の葉護も康居、烏孫、大月氏の翕侯とも同じく原音 yabʒu といわれるが、葉護の方はそれよりやや軟音化した原音の音寫ではあるまいか。雙方は役職として全く性格が異なっている。西突厥の例を以て前漢時代にあらわれる翕侯をかんがえると、ことを誤る。

二　「共稟漢使者有五翕侯」とかれらの占める位置

次に文末に根本史料として『史記』大宛傳大月氏と大夏との條を、更に『漢書』大月氏國傳を掲げたので、それらを元に、『漢書』大月氏國傳にまつわる問題を檢討する。

『漢書』大月氏國傳は、『史記』の文と『漢書』獨自の文をつなぎ合わせて成立している。首尾が『漢書』獨自の記事、その中間が『史記』大宛傳大月氏と大夏との條である。大月氏大夏の條といっても、大夏の全文を採ってきたわけではなく、「大夏在大宛西南二千餘里」から「皆臣畜大夏」といった前の部分だけを載せ、後の「大夏民多、可百餘萬。其都曰藍市城、有市販賈諸物。其東南有身毒國」は省いている。省いた替わりに入れたのが、『漢書』獨自の文である。それが、

「共稾漢使者有五翕侯」以下、「凡五翕侯皆屬大月氏」までである。『史記』大宛傳にはなく、『漢書』大月氏國傳に出てくるこの一文を「共稾漢使者」と「有五翕侯」に分け、「共稾漢使者」を前文に續け、「有五翕侯」だけを後文に續ける讀み方があるけれども、これは極めて不自然な、無理な讀み方である。「共稾漢使者有五翕侯」は、丘就却が獨立する以前の大月氏極東のあり方を示す重大な記事だからである。

「有五翕侯」は前句「共稾漢使者」によって限定される。「漢使に共稾するものに五翕侯あり」である。[43]「共稾漢使者」の前は『史記』大夏傳の引用であるから、「共稾漢使者」をそれにつなげると唐突で、不自然である。「共稾漢使者」以下を『史記』引用文とは切り離し、引用ではない『漢書』獨自の文句が新たに加わったところに注目しなければならない。顔師古に固執すると、「共稾」を「同じく節度を受ける」と讀むことになる。江上波夫はそう讀んだ。よって意味が通らない。その原因を原文脱落に求めた。[44]王先謙（『漢書補注』）は、脱落などとしないで、共は供、稾は稾給、「共稾」は漢使に供給すること、「漢使に馬食を供給するものに五の翕侯がいる」といって明解である。また王先謙は王鳴盛『十七史商榷』を引いて、「[大]月氏は遠く大夏に移っているうえに都護にも屬していない。顔師古は理屈にあわない。」といっている。『史記』の書かれた時代までにはなかった、あらたな時代の環境、つまり張騫歸朝の結果として、いつしか、といっても大分遲くなってからであろうが、漢と大月氏との間の直接通交がはじまっていることを意味するのが、「共稾漢使者有五翕侯」である。史乘にその直接交通や開始時期はあらわれないが、後述の敦煌懸泉置の木簡の出土量や編年から推測するなら、前一世紀前半からである。

漢使に糧食を、驛馬を、宿舍を提供する役目を擔った五の翕侯の所在については、白鳥庫吉が『魏書』西域傳の記述に基づいて比定を行った。『魏書』西域傳に記錄された五翕侯の所在はすでにヨーゼフ=マークヴァート Josef Marquart が注目し、[45]エドゥアール=シャヴァンヌ Edouard Chavannes が『魏書』の當該の文句を明示したが、[46]これに續いた白鳥庫吉

は、休密翕侯をワーハーン Wākhān、貴霜翕侯をハンドゥード Khandūd、雙靡翕侯をマストゥージ Mastūj、肸頓翕侯をバダフシャーン Badakhshān、高附翕侯をヤムガーン Yamgān に比定し、論法は正統且つ結果は當を得たものとなった。ここでは白鳥を概ね是とするが、若干の補正をする。[47]

北魏に鉗敦というのは漢代に貴霜翕侯の城市であった護澡城である、と『魏書』西域傳はいう。[48] 白鳥庫吉は、鉗敦はいまのハンドゥードの古稱であるから、護澡もハンドゥードだという。しかし、護澡が Khandūd を寫したとはみえない。エドウィン=プリーブランク Edwin G. Pulleyblank は護澡を復元して Waχš とし、「南流してアム河に入る Waχš 河」と關わりがあるまちと見ている。[49] 鉗敦は『大唐西域記』達摩悉鐵帝國（『續高僧傳』卷三達摩笈多傳では達摩悉鬚多國と表記）の首城昏馱多であるにちがいない。達摩悉鐵帝は『唐書』西域傳では鑊侃（＞Wākhān）と記し、王居は塞迦審（＞イシュカーシム Ishkāshim）とする。因みに、『魏書』では伽倍、『洛陽伽藍記』卷五の惠生行記では鉢和と異記する。達摩悉鐵帝、卽ち鑊侃地方には、唐に昏馱多、北魏に鉗敦と寫されたまちがあり、また唐に塞迦審と寫されたまちもあった。ふたつは王居たりうるまちであったろう。東西に長く、南北がきわめて狹いワーハーンにはいまもイシュカーシムとハンドゥード、二つの町はある。前者はワーハーンの西端にあり、西流するパンジュ Panj 河がシュグナーン Shughnān 方面へ北上して大きく屈曲する西岸にあり、後者は同じパンジュ河上流の南岸で、ワーハーン中央よりもやや西寄りに位置する。

休密はワーハーンである。『魏書』西域傳には「伽倍國は故の休密翕侯で和墨城に都する。莎車の西にあり、代までは壹萬三千里で、人びとは山谷閒にすんでいる」[50]とある。休密は北魏には伽倍（乃至は倍伽か）とよばれ、莎車（ヤルカンド）の西方にあって山に圍まれた谷閒であったとするから、ワーハーンに違いない。『唐書』西域傳は資料を主として『大唐西域記』に據って、「護密は或いは達摩悉鐵帝國と曰い、護侃と曰う。北魏に謂うところの鉢和（乃至は和鉢か）なるものである。亦た吐火羅（つまり大夏）の故地である。東南へ九千里嬴りで京師に達し、横は千六百里。縱は狹く、纔に四五

里ばかりである。王居は塞迦審城で、北は烏滸河に臨む。（中略）顯慶年間にここを烏飛州とし、王[で西突厥の]沙鉢羅頡利發（Īśvara Iltäbär）[なる稱號をもつもの]を刺史に任じた。この地方は[唐の]四鎮から吐火羅道に入るところに當る。よって吐蕃に役屬している。[51]」とある。北魏にいうところの鉢和とは、『洛陽伽藍記』巻五城北にひく宋雲惠生法力たちの記録にみえるところで、ワーハーンであることは疑いない。護密、達摩悉鐵帝、護侃とも唐にはよんだという。達摩悉鐵帝國は『大唐西域記』で玄奘がワーハーンに對して與えた名稱であり、『續高僧傳』の達摩笈多傳ではこれを達摩悉鬚多としている。雙方ともDar-e Mastiṭ、つまりマスティトの門口を意味するのであろう。これらがワーハーンであることは、それが吐火羅つまり大夏の故地であるとする點、また東西の長さは千六百里で、南北極端に狹く、四、五里しかないという地形であることからもわかる。

休密は後世俱密、胡密（惠超『往五天竺國傳』）、胡蔑（慧琳『一切經音義』）ともよばれ、ワーハーンを指すのであるが、[52]『唐書』地理志「烏飛州都督府。以護密多國摸逵城置。領鉢和州。以娑勒色河城置。」の護密多と混同したのは白鳥である。護密多はその「多」によって休密護密との違いを明らかにしている。それは『大唐西域記』の拘謎多、クメダKumedhaであり、バダフシャーンの北の、ダルワーズDarwāz地方に當てられている。上掲の地理志は、唐がそこの摸逵という町に烏飛州と呼ぶ都督府を顯慶年間に置き、[53]鉢和州という一州をも統べることにした、ということを述べている。娑勒色河という小町がある地方が鉢和州である。娑勒色河といった地名はワーハーンには見つけがたく、ほかの州名がしばしばそうであるように、鉢和州というのは北魏由來の雅名と考えるほかなく、ワーハーンを指してはいない。白鳥は鉢和州とあるのをみて多分護密多をワーハーンと誤認してしまい、クメダの意味を詮索することになってしまった。[54]

このようにみると、休密翕侯も貴霜翕侯も同じワーハーンにいたことになるが、『漢書』西域傳大月氏國傳の五翕侯を列擧する順は、ワーハーンに沿って東から大體順になっていて、陽關からの距離では、最初の休密が七八〇二里、次が雙

靡で七七八二里、續く貴霜は七九八二里である。距離は信用しがたいが、[55]後述のように雙靡はワーハーン溪谷から山脈を越えた南側にあるので、五翕侯が東から竝んだ順序では休密の次が貴霜であり、兩者はワーハーンを東西に兩分していた。ハンドゥードがもとは貴霜翕侯領だったと北魏代にいわれたのを重視すれば、貴霜翕侯はハンドゥード邊から西を領し、イシュカーシム（あるいはIskīmisht, Sikīmisht）邊まででであったろう。休密翕侯はよってハンドゥード邊より東であったことが容易に判る。『魏書』西域傳の伽倍國は和墨城が主都であるから、休密城卽和墨城となるが、實際のまちは不明である。

現在のワーハーンの地理をみると、東方からワーハーン地方に入るには、カシュガルから行くのではなく、ヤルカンドから西行して現タシュクルガン Tashkurghan に登り、同名の河を南下してハークァーネ=ウジャバイ Khāqān-e Ujabai を西折し、一路ワフジール Wakhjīr 峠へと登る。この邊はタグドゥムバシュ=パーミール Taghdumbash Pāmīr と呼ばれ、八つあるパーミール地形の一つであり、水は東流している。これを西へと越えれば現アフガニスタン國境の急坂を渡り、ワーハーンに入るのである。よって水は西流してワーハーン河 Āb-e Wākhān（あるいはパーミール河 Āb-e Pāmīr）となり、ブザイ=グムバド Buzai Gumbad（あるいは Buzi Gumbad と表記）に至る。アフガニスタン國境畫定委員のジョージ=N=カーゾン George N. Curzon は、この間に人居なく、河の北側は牧地になっている、と觀察している。[56]そこからランガル Langar、サルハデ=ワーハーン Sarhad-e Wākhān（別名サリグ=チョーパン Sarigh Chōpan）を經てカライェ=パンジャ Qal'a-ye Panjah まで進むと、そこはパンジュ河にワーハーン河が既に合流した後である。[57]パンジュ河は更に西流し、ハンドゥード Khāndūd の町（鉗敦、和墨、昏馱多）に到る。パンジュ河はやがて北に屈曲するが、その西南にイシュカーシムの町を見たのち、シュグナーン Shughnān、ローシャン Rōshan 地方の西外を北流して、ダルワーズ Darwāz 地方を圍繞するように流れるのである。

このようにワーハーンの地勢と集落を觀察して、そこに二つの政治區が置かれるとすれば、それは東のワーハーン河流

域と、それより西の、ワーハーン河と合流したのちのパンジュ河流域、この二つの地域に、ワーハーンは分かれるのであって、東はワフジール峠からカライパンジャの西の兩河合流點まで、西はハンドゥードからイシュカーシム邊まで、この二區となる。そうすると、結局休密翕侯領と貴霜翕侯領はこの東西に同定してよいであろう。貴霜翕侯の町を『漢書』に護澡（ワフシュ Waχš）とするが、ワフシュがハンドゥードでなければ、イシュカーシムを措いてない[58]。なお現在は、行政區名としてハンドゥードがワーハーンと呼ばれることがある。

東部ワーハーンである休密翕侯領から南へ、キリク Kirik 峠かミンタカ Mintaka 峠をへれば、ギルギト Gilgit 地方へ達するが、一方ボロギル Baroghil 峠を辛苦して越えるならば、ヤルフン Yarkhun 谿谷へ下れる。そこが雙靡翕侯領である。『洛陽伽藍記』巻五の宋雲たちの旅行記である『惠生行傳』の賒彌、また『大唐西域記』や『唐書』の商彌 *Shambi と音通し、一方『唐書』の俱位や『惠超往五天竺國傳』『十力經』序の「悟空行記」の拘緯でもある。シャヴァンヌや現地を熟知するスタイン Marc Aurel Stein は、チトラール Chitrāl とする。マストゥージとチトラールは、ひとつの川に沿っていて、北東に位置するのがマストゥージ、南西にあるのがチトラールである。兩者間をひろく賒彌とみるのが自然であろう。このような雙靡翕侯はヒンドゥークシュ東脈の南に在り、貴霜翕侯領からはちょうど山脈を越えた南に位置していたことになる。つまり、雙靡翕侯はほかの翕侯と異なって山脈の南にあるが、それはワーハーンを南下して北インドへ通じる孔道の最北部にあたるのである[59]。チトラールからドローシュ Drosh を通り、冬季には不通のラワレイ Lawarai 峠を越えてディール Dīr を經れば、下スワート Swāt へ出ることができ、ペシャーワル Peshāwar 平野に直通する。一方、チトラールからクナール Kunār 河をそのまま下れば、アストール Astōr、チガサラーイ Chiga Sarāi を通ってニンガルハール Ningarhār、古代のナガラハーラに出る。雙靡翕侯の地理位置は、近郷ではガンダーラとナガラハーラを睨む位置にあってきわめて重要であるが、さらに西インドともつながる交易の幹線道路の北部部分に當っていて、漢使に供給するほか、

貴霜を含む他の四翕侯と離れて、ひとり山南に出張っているのが、重大な事態なのである。

白鳥は肸頓翕侯の場をバダフシャーンとする。バダフシャーンは地圖によってどこまでを指すか一定せず、南北に宏大に亘る場合はダルワーズ地方の南部全體を占めるようである。本論では休密翕侯や貴霜翕侯、そして雙靡翕侯が占める實際の地理上の廣さ（あるいは長さ）から推して交通路上のバダフシャーンを指すものとみ、いわば狹義に解釋し、ダライェ=イーム Dara-ye Īm 邊からボハラク Boharak（Barak とも表記される）邊までとその南北若干を覆うものとみておく。[60]

高附翕侯は都護や陽關からの距離が他と比べて長く、あるいはその音がカーブルを想起させるのか、ヒンドゥークシュ山脈南側の、現アフガニスタン首都カーブル Kābul だと、誰しもがいう。しかしカーブルを確實に示す漢字表記は七、八世紀を待ってもあらわれず、獨立してカーブルを指す漢文獻上のことばはなかったかもしれないのである。カーブルは罽賓とか迦畢試というものに含まれていたようである。このような次第に則るなら、そんな早い時代にカーブルが存立していたのか、その基盤は何であったのか。中國の記錄に殘るような明確な存在でカーブルがありえたのか、もしそうなら、その歷史經濟的背景は何か、いずれも未詳であって、高附の比定は甚だ疑問である。高附卽カーブルは安易な比定のようにみえる。『魏書』の比定を利用して『漢書』の五翕侯の地理上の位置をはっきりさせた白鳥の、高附に關する證明手續は穩當であって、『大唐西域記』卷一二では淫薄健と音寫する、現ヤムガーン Yamgān 地方が高附翕侯であることはもっともな結論である。それは、コークチャ Kokcha 河にそってジョルム Jorm からクラーノ=ムンジャーン Kurān o Munjān を中心とする地方までの、山中の開けたところである。その南でコークチャ河は左右兩河に分かれ、右流タガーベ=アンジュマン Tagāb-e Anjuman（ある地圖ではタガーベ=ドースト Tagāb-e Dost）に沿って遡上し、西折してコータレ=アンジュマン Kotal-e Anjuman へと登り、峠を西へ下った谷がパンジュシール Panjshīr 河である。分かれにもどって、左流はタガーベ=ムンジャーン Tagāb-e Munjān とよばれ、分流點に近く南岸にクラーノ=ムンジャーンの町が位置する。この河は

ヌーリスターン Nūristān に發する。

五翕侯は、このようにみると、大體パーミール地方の南邊から西邊の河沿いにあり、ワーハーンの東西距離を千四百ないし千五百里とする『唐書』西域傳にもとづけば、休密、貴霜翕侯とも大體七百里の長さの地域を所領としたようで、この長さをほかに當て嵌めてみると、五翕侯ともそれぞれ同じような大きさの平川地方であることが判る。大月氏は、移動當初、アム河北方の有力都邑周邊に女王を戴いて幕營を張り、そこから征服した大夏（トハーラ）を支配し、翕侯號を授けられたうちの五翕侯が大月氏領の極東を占めていたのである。五翕侯全體を俯瞰すると、變形したT字を左へ横倒しにした恰好になり、その交點を占めていたのが、ワーハーン西部、多分イシュカーシムからハンドゥードに居た貴霜翕侯である。その東には休密（ワーハーン東部）、北西に肸頓（バダフシャーンの一部）、南に雙靡（マストゥージーチトラール）、南西に高附（ジョルム以南のコークチャ上流）の四翕侯がいたが、雙靡だけが貴霜と峠越えで繋がっていた。

従って五翕侯の所在は、玄奘が六四三年ごろ通った道筋によく比較できる。玄奘は歸路に、アム南岸にある現カライェ=ザール Qal'a-ye Zāl である活から東行して、菩健（ハーナーバードまたはターラカーン Ṭālaqān）に至り、[61] 訖栗瑟摩（キシュム Kishm）、エフタルの殘滓がいたらしい呬摩怛羅（ダライェ=イーム Dara-ye Īm）、鉢鐸創那（バダフシャーン）、淫薄健（ヤムガーン）、屈浪拏（クラーノ=ムンジャーン）、達摩悉鐵帝（ワーハーン）と進んでいる。五翕侯の位置をこれと對比した場合、雙靡はヒンドゥークシュ主脈の南だから措くとして、訖栗瑟摩から東の達摩悉鐵帝まで、すなわちキシュムからワーハーンまで、五翕侯の竝びと似たり寄ったりで、トハーラ東部における交通路は數百年變わっていない。

それもそうだが、ここで改めて強調したいことは、五翕侯の地理配置である。漢から使節が大月氏へ入る場合では、この地方が最初の大月氏領であり、更に西方の中心地方である大商販の地、監氏（藍市）城にむかう道路上を占める。よって、『魏書』は後世の編纂ではあるが、それにもかかわらず、『漢書』五翕侯の位置を知らせる重要な史料でこそあれ、極

端特異な史料ではない。『魏書』を使った白鳥の五翕侯の位置比定は牽強附會の臆說でもない。『魏書』の記錄が漢代五翕侯の政治經濟地理上の位置を正確に傳えていることを、白鳥は證明したといってよい。ここでさきほど觸れたフルムの東方をトハーリスターンとみる『世界の諸疆域』に依るならば、トハーリスターンの首城は唐代の活、つまりワル *war に相違なく、トハーリスターンが漢代の大夏（トハーラ）であるなら、『漢書』大月氏國傳の大夏の監氏はワルでなければならないであろう。

五翕侯が大月氏翕侯の全部でないことは、ペリオが、“La Ta-Hia était gouverne par un certain nombre de hi-heou (yaβru), dont les Chinois ont connu cinq…”と陳べたとおりである。[62]「漢使に共稾するに五翕侯あり」と讀んでいたのである。『漢書』康居國傳の五小王と書法が同じであるから大月氏でも翕侯は五人だけだったと見なすこともできない。この點で、『後漢書』大月氏國傳に、貴霜翕侯丘就却が「他の四翕侯を攻滅して自立した」とする記事は『後漢書』編者が『漢書』を誤讀した結果であって、前書を勝手に解釋して作ったといわねばならない。[63]『史記』大宛傳に「町町に小長を置いている」といっている。大夏の町々は藍市城のほかはみなごく小さな町であったことを示唆する。多くの町があり、大月氏極東の五地方が五翕侯の地であり、その所在は限定された一部の地方である。大月氏が領有した大夏全體に五翕侯だけが翕侯として散在していたのではない。[64]王先謙『漢書補注』やペリオの認識がすでにあるのに、師古注に拘泥してそれを檢討しなかった內田吟風や江上波夫などは信じがたい。

バグラーン Baghlān、クンドゥズ Kunduz、タハール Takhār、バダフシャーンの諸地方にかけて、いまもなお大小多數の町邑がある。直接古代の狀況と現在が同じだといえなくても、引き較べる價値はある。唐史の資料にはトハーラには二十餘所を超える城邑があるというからで、ここには漢代でもかなりの數の城邑が存在したのであろう。現在のパシュトゥーン遊牧民を參考にすると、かれらは冬營地をスルハーブ Surkhāb ないしクンドゥズ河中下流に定め、夏營地を總

じてバダフシャーンのシェワShewa湖周邊にもつ。その意味から五翕侯の所在を彼らの夏營地とみ、スルハーブないしクンドゥズ河下流にその冬營地があったとみても、城邑の數は拾であって、それでは律しきれない數の城邑がこの地方にはあった。

唐代の例で『大唐西域記』卷一末に、覩貨邏國は二十七國に分かれているという。『舊唐書』卷四〇には、龍朔元年（六六一）に月氏都督府を吐火羅國の所治である遏換城に置き、その葉護に、つまり吐火羅葉護にそこを領めさせるとあり、その部內を分けて二十四州を置き、都督、つまり葉護がこれを統べる、とある。『唐書』卷四三下は、遏換城を阿緩城と記し、二十五州に增やしているが、同じ『唐書』でも卷二二一下、西域傳では二十四州とあり、『唐會要』卷九九も、永徽三年（六五二）に置州縣使である王名遠をそこに派遣して月氏都督府を發令したとき、そこに二十四州とあったとあり、同じ卷九九でも龍朔元年の記事には、「[吐火羅葉護である]烏濕波に使持節月氏等二十五州諸軍事月氏都督を授けたとある。月氏都督府につづいて記錄された太汗都督府は十五州あるとする。この都督府も實はアム河とヒンドゥークシュ山脈の中間にあって、月氏、太汗兩都督府を合わせると少なくとも三十九州となる。分けたと言っているが、そこにもともとそうのような數の町邑が古來存在していたのをそのまま唐朝が承認したのに相違ない。月氏都督府下の州名のいくつかはそれらを『世界の諸疆域』の記述と照合すると判るように、アム河北岸の地方名であった。よって月氏都督府は、必ずしも漢代の大夏（トハーラ）、つまりアム南岸地帶とは、一致しないのであるが、それでもなお、トハーラの擁する小城の數は、冬營地夏營地を區別したとしても、五翕侯の數どころではないのである。

さてここで、五翕侯の位置に關聯して桑原說にふれておくべき事は、大月氏は天山北麓からソグドに移動したとかれがみたことである。[65] これは不思議な見解であって、漢と大月氏との通交が五翕侯を經ておこなわれていたとする『漢書』五翕侯の記事からすれば、大月氏がソグドに居たとはみえないからである。桑原說は五翕侯の存在を無視しないと成り立た

ない。ソグドもアム河の北だといえば北ではあるが、あまりにも離れすぎている。桑原は、大月氏がフェルガーナ（大宛）の西南約六九〇里に居たとする『漢書』大宛國傳に信を置き、大月氏はサマルカンドに落ち着いたと。大月氏がホラズムの一部まで羈縻したと考える桑原に、白鳥説を受容できるはずがない。ソグドには康居の五小王がいて、康居の土地であると白鳥は主張するからである。しかし桑原の大月氏サマルカンド王庭説を端的にいえば、かれが大宛貴山城に當てる、フェルガーナ盆地西端のホージェンド Khojend を中心にして、半徑六九〇里の圓を描けば、サマルカンドがその圓周上に乗るというものである。同じ圓周が鐵門（Derbend）より東の地點をも通り、アム北岸地方にも候補地は指摘しえたはずである。

また、ホラズムの一部まで大月氏が羈縻した證據はない。白鳥は康居のソグド支配について説明ができていて、その内容も理解できる。それによれば、康居五小王の地のひとつ、蘇薤城はシャフレ=サブズに比定され、鐵門北西側の要衝である。鐵門を通過すればアム流域である。張騫が大宛まで來て、そこから大月氏に行こうとしたとき、大宛は通譯をつけて先ず康居にいかせ、康居が大月氏へと張騫を導引している。[66] 張騫は、大宛から康居、康居から大月氏に行くという二段構えの手續に從った。フェルガーナからサマルカンドへ出、ヒサール山脈の西足を回って、シャフレ=サブズを經由して鐵門を通過し、アム河流域に入ったと白鳥はみる。張騫はフェルガーナからすぐ西のソグドまでまっすぐに行ったと桑原はいうが、これでは、康居に伺いを立て大月氏にいくという張騫傳の内容に悖るであろう。白鳥の康居五小王に關する地理的比定は當を得ている。[67] 桑原の考えとは違って、張騫は、ソグドなる大月氏ではなく、鐵門の東にしてアム北岸なる大月氏幕營へ到達したのである。

張騫は大月氏に行くために匈奴の地を脱出してまず大宛に到着したというから、カシュガルあたりへ出て、フェルガーナ山脈南麓を西進してアンディジャーン Andijan を通過し、ホージェンドへ達したのであろう。『漢書』甘延壽、陳湯の

傳にみるように元帝の建昭年間（前三十年代前半）に至ってもなお張騫が使った往路は匈奴の手にあった。歸路にはタクラマカン南緣を使ったことは明白であるが、そこでも匈奴に捕まった。北緣よりまだしも自由な道路であったろうに。

漢がタクラマカン以西に關わろうとした張騫歸國以後の時代、敦煌を出てアルティン=タグ Altin Tagh 北麓を西に過ぎることができれば、ホタンまで達しえた。さらに莎車（ヤルカンド）まで行って、そこから疎勒（現カシュガル）には行かず、タシュクルガンへ登って、パーミールのひとつを通過し、ワフジール峠によってワーハーンへ入り、まず休密翕侯の共稾を受けて西の大月氏へ到着する。それが漢使の道であった。だからワーハーンなど大月氏の東玄關に達し、漢使はそこで糧食等諸般の補給を受けた。供給の任に當ったのが、五の翕侯であった。荀悅の『前漢紀』に「共稾漢使者」の一句がないのは、五翕侯の記事がない『史記』を荀悅が重視したともかんがえられる。また康居國傳の「康居有小王五。（中略）凡五王屬康居。」は大月氏國傳の五翕侯の箇所とよく似ているが、「共稾漢使者」のような限定句がないのは當然で、康居が大月氏とは全然別の地理環境にあったばかりでなく、漢との交通において大月氏とはまったく異なっていたからである。康居國傳五小王と大月氏國傳五翕侯との記述の違いこそ、大月氏麾下にあって漢使を接待した五翕侯の特質をよくあらわしている。

『史記』と『漢書』の大きな違いは、體裁に顯れたその編集方針である。『漢書』は定住遊牧、土着行國の別を問わず、西域各勢力を領土國家竝みにすべて「國」扱いにした。『史記』にはその認識はなかった。『漢書』の方針を以てすると、大月氏國の場合、大宛傳が記さなかった首都をどうしても記す必要に迫られた。そこで、『漢書』は少しく操作せねばならなかった。『史記』大夏の記事を全部採らずに一部削去し、新たな文と入れ替えた。『漢書』は『史記』大夏の藍市城を大月氏國の都と認識し、それを大月氏國傳の冒頭で「王治監氏城」と使った。『史記』には大月氏が河北に王庭をもって河南の大夏を征服支配したとあるから、當然『漢書』としては、「大月氏國」とはアム兩岸に及ぶ「國」との認識である。

河北に王庭があったと『史記』にいうのであるから、王居幕營は河北の有力な町の周邊にあったはずであるが、どうしたわけか『史記』は城名を書かないので致し方ない。そこで『漢書』は編集の都合上、單純な机上操作で、アム河の南北にわたる大月氏國であるから、その都を大夏の方の大城市藍市城とした。それが現行の『漢書』で監氏城となってしまったというわけである。かくして他國と同じ體裁に大月氏國を整えた。羽田亨は『漢書』監氏城の「監」にも「藍」音があるという。[68] これに從えば、藍市でも監氏でも、異城ではない。『史記』の方がもともと監氏であったかもしれないことも勿論想定しなくてはならないが、こうなった原因を『漢書』編集方針の一に求めたので、かく考えておく。字形はここではあまり重要ではなく、手續としてはこのようなわけである。プリーブランクは藍市、監氏、藍氏の藍監がフルム Khulm を想定しうるとし、後に詳論するとした。[69] どこでくわしく論じたかは判らないが、藍監は Khulm と音韻上繋がるようにはみえない。現代、クンドゥズとマザーレ=シャリーフ Mazār-e Sharīf とを結ぶこの町がどのくらい古いかは詳らかでない。アム南岸に限っていえば、遺迹として古いものほど河岸に近在するような印象を持つ。それはフルムの町の南北においてもいえる。つまり北にシャフレ=バヌ Shahr-e Bannu、次南にいまのフルム（タシュクルガン）のまち、一番内陸がシャフレ=コナ Shahr-e Kohnah といった按配である。またクンドゥズについて言えば、アム河の南岸にカライェ=ザールの舊迹であるシャフレ=コナがあり、内陸にクンドゥズのバーラー=ヒサールがあり、いまのクンドゥズがある。バーラー=ヒサールは京都大學イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊考古班が一九六三年夏に發掘した際、もっとも深い試掘坑で自然の細砂層が海拔三九九mであらわれ、このレベルは遺迹周邊より低く、バーラー=ヒサール最初時代の自然層と確認された。遺迹は、地山である自然細砂層上に重なった一二の人工地層から成り、最深の第一一、一二層からは四、五世紀の特色ある赤褐色土器片が多量に採集された。[70] バーラー=ヒサールの最終報告は未刊行であるが、この事實は發掘者のひとりであった筆者も確認している。さらに北東のイマーム=サーヒブ Imām Ṣāḥib でも事情は同じである。私

は理論上では、藍市、監氏はムスリム資料上のワル（ワルワリーズ）と考えること、先述のとおりである。

『漢書』が大月氏國都を南岸の監氏城とするのは編集の都合であって、歴史の經過を反影したものではない。『史記』は大夏の大都を藍市城とする。藍市監氏を同一とみて、史記と漢書のこの違いを大月氏が大夏へ王都を移した證據とみたひとは甚だ多く、マルクヴァートや、白鳥もその一人である。[71]『史記』大夏傳と『漢書』大月氏國傳との違いが編纂方針に起因することを考慮せず、『史記』と『漢書』を竝べてみて、違うところはなんでも新出情報とすると、ことを誤るのである。新情報だとして使うなら、新情報であることを證明せねばならない。『漢書』に初現する記事「共稾漢使者」以下を西域都護設置によって得た情報だと解釋し、張騫以後前漢末までに入手した情報だという場合もこれまでよく使われた手であるが、根據はなんにもない。五翕侯の設置が大月氏征服當時ではなく、後刻のことであるともいう。大月氏は大夏に王都を移動し、南渡と同時に五翕侯を設置したという。これも單に想像にすぎない。思うに、征服時に征服地を放置、後に南渡したり、あるいは翕侯を設置したりする支配の仕方は不自然である。一方、『史記』に五翕侯の記錄はないので、張騫時代の大月氏には［五］翕侯がなかったと考えるひともいる。大月氏漢の間の交通が頻繁になり、五翕侯が漢にとって相當な重要な關心事となったからこそ、『漢書』は五翕侯を記錄した。日常のありきたりでは記錄にのぼらず、特別な事件が注目され、歴史の記錄にのこるのである。[72]

さて、康居の小王はソグドという廣域に點在したが、大月氏が任じた五翕侯の地は境域の極東にあたり、大葱嶺の隘路である。翕侯は交通路に沿って、東方の玄關口を固めるように、ワーハーンから西へ貼り付いている。『漢書』はこの五翕侯こそが漢使に共稾すると記錄したが、一方で五翕侯は對漢通商の要衝の守備でもあり、通商の利の確保をも目的としたはずである。對漢通商の中心となる物品が大月氏にとっては絹や絹織物であるなら、それは大月氏だけの消費であるはずがない。世界に冠たる貴重品であるからには轉賣すれば利は莫大である。絹は大月氏や五翕侯からどこへ向かったのか。

『漢書』における五翕侯の意義を論じたものがない。況してやワーハーンを中心にして東西に走る道路を漢大月氏間の公式な直接交易を考慮して論じたことも聞かない。そこから南下する通路、つまり南方への交易があったかなど當然聞かない。ワーハーン地方は、南下するとペシャーワル平野（ガンダーラ）へ到着する。南北道路の起點でもあり、T字形通路の三方向を睨む要衝である。因ってワーハーン西部の貴霜翕侯領から、ドーラ Dora 峠を東越したマストゥージーチトラール地方に雙靡翕侯領があった意義はいうまでもない。『漢書』大月氏國傳に雙靡翕侯が記録されている御蔭で、そこから南へ下っていく道路があったことが判る。ディールを經由してペシャーワル、タキシラ Taxila へと通じた通商路があって、そのねもとを牛耳って交通を監視したのが雙靡翕侯である。四から六世紀中葉まで、ヒンドゥークシュとカラコルムとの間を通過し、南北に走る懸崖の道、ワーハーンから南下して北西インド、ガンダーラへ通じる道が、中央アジアとインド亞大陸を繋ぐ要道であった。既に私は別稿でこのことを論證した。[73] その道路上のタキシラやガンダーラは、遠距離貿易商人たちにとっては山地の南麓にあり、重要な荷積み荷下ろしの場であり、冨の蓄積と多方向からの文化の集積があった。商人による佛教護持は多數の佛寺造營に反映されている。

大月氏の大夏征服以前から細々とした地域間交易は存在したはずである。張騫が大月氏から歸ってから、しばらく通好はなかった。後述の懸泉郵亭遺跡で出土した漢簡上大月氏朝貢に直接關わる紀年は、前一世紀前半から中葉頃に集中している。この事實からみれば、漢の對大月氏遣使やそれに對應する大月氏の對漢朝貢が急速に興ったのはその頃である。漢大月氏交易は雙方が公式に官でコントロール（接待）するという意味では、遠距離直接交易が展開したといえる。[74] 一方、當時世界最高の文明をもったローマが共和制から帝政に移り、エジプトをローマに編入すると、アレクサンドリア Alexandria とインドの間で間接的に交易が展開した。インドからローマへ向けた物資に漢の絹織物があったことは名高い事實であって、インドの絹ではなく、當然漢代中國の製品であった。アレクサンドリアからナイル上流のコプトス

Koptosを徑由して陸路紅海灣奥のミュオスホルモスMuos Hormosやベルニケ Bernikēの港灣に至り、或いは一方、地中海東沿岸からはナバタイ王國のペトラPetraを徑て、紅海北岸のレウケーコーメー Leukē Kōmē港まで達する。これら三港灣から灣口まで下った物産はアデンからアラビア海の波頭を越えてインド西海岸に至った。アラビア海に發生する季節風が海運に利用されるようになると、アラビア半島西南部沿岸を遲くとも六月までに出發すれば、アラビア船舶は南西風に乘ってアラビア海を渡り、數旬を以て半島北西隅ないしはマラーバル沿岸地方の港灣に入った。歸途は十月からの逆風をまった。[75] アレクサンドリアとインド半島部はわずかな月數の內に雙方の物資を入手することができた。インドとしては、世界最高の文明ローマ帝國の諸文化をそのままの形で入手でき、ローマとしてはインドの港灣に集積された、廣く言えばアジアの珍奇な物產を得て、その生活をより豐潤にした。海上通商ならではの特色は、駝馬運搬とは比すべくもない多量の物品を毀損すること少なくして運び得ることである。それは當時の世界では想像を絕する事態であり、ローマとインドがキリスト紀元前後にこれほどまで接近したことは紛れもない事實である。[76] 地方的な陸路の交易をはるかに凌駕する海上交通による莫大な富の力は周圍から必要な物品を引きよせる絕大な吸引力を持つ。駝馬に賴って中央アジア南邊のオアシスを渡り行く零細な漢大月氏交易は、一點の交易品、絹織物のもつ絕大な魅力によって、南へ强引に吸引された。ローマ帝政初期のガラス器靑銅器がヒンドゥークシュ南麓のベグラーム遺跡第二期の密封された一棟二室に充滿して發見されたのも、モーティマー=ウィーラー卿 Sir Robert Eric Mortimer Wheelerの辯を俟つまでも無く、右の交易をよく反映した物品である。[77]

カラコルムの懸崖路をつかう、ギルギット、ダレルの通路は下スワートからガンダーラに達したが、それは遲くとも四世紀になって中國をめざす佛僧の動きによって活況を呈し、六世紀中葉に不通に近い狀況に陷った。しかし、貴霜とは僅か六十里しか隔たらぬ雙靡翕侯の地理位置を前述のように思量するならば、紀元前後にはチトラールからディールを經由

し、下スワートに達するいわば西方の路が絹織物を運ぶ路として活況を呈したと私は見ている。インダス河をわたり、更にインダス河口のバルバリコン Barbarkon へ惹き付けられる。あるいはガンダーラから、タキシラ、マトゥラー、ウッジャインとつなぎ、カーティヤーワルからインド半島の北西隅のバリュガザ Barygaza へ導かれて海上を渡ったのである。一世紀中葉ごろこの交易に深く關與していたギリシア人が交易の手引き書として著わしたといわれる『エリュトラー海の周航記』*Periplus Maris Erythraei* に、オゼーネー Ozēnē の名でウッジャイン Ujjain を、またマドラー Modura の名でマトゥラー Mathurā を、またさらにその奥手に居るバクトリア人（部二〇一六、一九九頁によれば都市バクトラ）を記錄していることは奇特といわねばならない。[78] ローマとインドをつないだ交易は、巨萬の富の力を西インド沿岸部にもたらした。その名殘は多數の石窟寺院であり、それらが前一世紀後半と一世紀に集中して開鑿されたのは、その地方の王朝の盛衰にもよるが、このような商業と商人たちが佛教に惹き付けられたからである。[79] インド半島北西隅の石窟寺院形成から一歩後れて、一世紀になって急速に佛教を展開させたのはタキシラを含むガンダーラであるが、その佛教の急激な隆盛は、このような稀に見る遠距離交易という經濟環境が現出させた文化現象の一である。石窟寺院は自然丘陵の中腹を人工で穿って成立する。ガンダーラ佛寺は平石積みで建設されている。よってガンダーラ初期の建築はその展開過程が建築の相互比較によって檢出できそうであるが、それがそうでもないのは、あまりに急速な商業經濟の展開が佛教寺院の建立も急がせ、寺院の漸次的展開の探索を阻止しているようにみえる。

漢大月氏通商を髣髴とさせるひとつの重要な證據は、一九八七年八月に敦煌安西間で發見された懸泉置遺迹とその出土漢簡である。西域使節はこの驛遞施設で接待を受けた。大月氏五翕侯の場所が東から來る漢使を接待する場所であり、係であったのなら、この遺迹は大月氏を含む西域使節を受け入れる漢帝國最初の驛遞であった。[80] 一九九〇年一〇月から一九九二年末にわたって發掘された。規模は平面一五〇×一五〇（㎡）で大建築であり、主要な出土品は、年時の判る紙文書

や多數の木簡である。それらの（1）堆積關係、（2）層位、（3）當時掘られた穴に廢棄された遺物、あるいは（4）その穴は相互に切り合いがあり、そこから穴の前後關係が判る。そういった事實に基づいて發掘者たちが明らかにした編年では、はじまりは武帝の元鼎から征和にいたる約三十年間（前一一一年から前九二年）、昭帝より後漢の建武五年までの約百年間（前八六年から二九年）が盛時。魏晉には驛遞ではなく、烽臺として使われたと判定している。

紙文書、帛書、壁面の題記のほかに、二萬三千點に及ぶ漢簡は、三カ所の穴藏遺構などから出土し、整理終了分の漢簡は一七、九一四枚、就中三六〇點が、行國土着國を問わずそこを通過するに際して、漢官が接待した內容の記錄である。木簡には、『漢書』西域傳所見の諸國、西域使節や漢の使節、使節の官職、氏名、構成、使節名などが記される。自ら西方からそこに到着し、あるいは漢使の歸國とともにやって來た使節もいる。彼らに供せられた糧食、その種類や量、傳乘、往來の日付、移動狀況など、西域諸勢力と漢が通交した事實が事務的に淡々と記して殘されたのである。そればかりではなく、木簡には、『漢書』西域傳だけで知られていた大月氏の翕侯が、「大月氏休密翕侯」「大月氏雙靡翕侯」といった呼び方で示され、それらが翕侯の正式な呼稱であったことを示唆している。史書にのみ知られた名稱が實際に呼ばれた形を以て現實に現われ、漢が大月氏の翕侯をどう呼んでいたかが明らかになった。貴霜翕侯の名はあらわれないが、こうして知られた新事實とその年次、そこに文獻記事を加味するならば、從來貨幣學や碑銘學から研究されるほかなかったクシャーン朝初期の編年を、全く別の角度で新しく見る手がかりを、取り敢えずは、クシャーン朝初代クジュラ=カドフィセスの編年について、あたえることができる。

三　『後漢書』大月氏國傳の錯誤

『後漢書』大月氏國傳は、『史記』『漢書』の記事に元をとったので、それらと一應似通ってはいるが、よく見ると異様に違う記述がある。そのようなところは、『後漢書』の編者が、元の文章なり文意なりを勝手に解釋したり、理解したために出現した錯誤、つまり編者の誤解である。從來の研究ではこのような記事を『後漢書』ではじめて知らされる新出情報だと受け取ったから、それに基づいた歴史はとんだ誤解である。[81]『後漢書』大月氏國傳には、まず「大月氏國。居藍氏城。西接安息四十九日行。東去長史所居六千五百三十七里。去洛陽萬六千五百三十七里。戶十萬。口四十萬。勝兵十萬人。」とある。次に、「初月氏爲匈奴所滅。遂遷於大夏。」と續き、「分其國爲休密雙靡貴霜肸頓都密。凡五部翕侯。」となる。『史記』大宛傳が言及するのは、大月氏が嬀水の北に王庭を設け、南の大夏を臣從させたということ、それだけである。『漢書』大月氏國傳もこれに從っている。なぜ『後漢書』だけが「遂遷於大夏」といい、『史記』『漢書』と違った內容を記すのか。『後漢書』編集に際して『史記』になかった新資料があらわれたはずもないから、この『後漢書』の記事を元に、大月氏が王庭をアム河の北から南の大夏にある時點で移したと、讀めるかどうか。もしそう讀んだとしたら、それは讀み手が證據なしの、いわば勝手な解釋で讀んだのである。『後漢書』西域傳だけをみれば、そんな氣になる人もいようが、この一文は『漢書』張騫傳の知識から造ったもので、張騫が武帝に報告したなかに、「大月氏は重ねて西へと敗走し、大夏の地へ移動した」。原文は「大月氏復西走。徙大夏地。」である。[82]『後漢書』が直接手本にしたのはこれであろう。『史記』大月氏傳にいうように、大月氏の王庭はアム河の北岸にあり、南岸の大夏は大月氏が征服した地である。『後漢書』が「大夏の地へ移動した」といったのは、北岸は特に名がないから、征服した南岸の地を以て舊の塞の地からの移動方向を大雜把にいったまでである。「初―遂―。」は、月氏の甘肅居住時代から、アム上流域に移動して大夏を征服した

狀況までを、『漢書』に沿って略述したに過ぎない。張騫傳の記事を顧慮せずに、『漢書』大月氏國傳にない『後漢書』大月氏國傳の記事を以て、北岸から南岸に王庭を移したと考えるのは曲解である。大夏に大月氏が移り住んで、王庭を移したとは、『史記』『漢書』のどこにも記錄がないことである。『後漢書』大月氏國傳前半は、主に『漢書』に基づいた節略であるから、情報としては『漢書』の域を出ない。『後漢書』に『漢書』の書き換えや節略があるように、『漢書』大月氏國傳の當該箇所もまた實は『史記』の書き換えである。『史記』大宛傳は、「西擊大夏而臣之。遂都嬀水北爲王庭」とする。[大月氏は]西の方の大夏を攻擊してこれを臣屬させ、その結果アム河の北に王居を設けた、という。これがこの關係の記事すべての出所であり、確實なのはこれだけである。大月氏は嬀水の南なる大夏を臣從させたが、王庭は嬀水の北に營んだと、『史記』は斷言し、それについて『漢書』も何ら新規なことを言ってはいない。情報は『史記』止まりであって、それしかない。だから『後漢書』としては、前二書に基づいてそれを略述するしか手はなかったはずである。『後漢書』西域傳各國列傳內容の簡素な記述を考えると、編者は讀者の『漢書』西域傳併讀を前提にしていたのではないか。

『後漢書』大月氏國傳で次に來るのが、「分其國爲休密雙靡貴霜肸頓都密。凡五部翕侯。」であって、「その國を分かって休密、雙靡、貴霜、肸頓、都密とした。みなで五部の翕侯である」ということである。「その國」とは何か。文の直前にある「大夏」か、前文の「月氏」か。確かめるには、『漢書』大月氏國傳を參照するしかない。「五翕侯」は大夏の條末に記されているから、『後漢書』編者も、「其國」を、卽ち「大夏」と見て、それを五部の翕侯に分けたと解釋したはずである。ところで、『漢書』は「漢使に稾給するものに五人の翕侯がいる」といっているのに、『後漢書』が大夏を五翕侯に分けたというのは一體どういう理由があってのことか。思うに、これは『漢書』の記事を根據なく勝手に解釋して改變した、誤謬である。グルネ Frantz Grenet は「その國」を大月氏國と理解したのであろうか、五翕侯を河北にいた大月氏の住地に貼り付けている。[83] 大月氏國ととるならば、河の南北にわたってはりつけるはずだが、どうして北だけなのか、判然とし

ない。『漢書』によれば五翕侯はみな大夏にいたのであり、少なくともアム河や現ワフシュ河の北側は大夏ではない。第一章で少し判ったことは、烏孫や康居の翕侯が行國の生活圏である移牧の土地にはいず、征服した土地にいるらしいことであった。つまり、烏孫では北道の北西部から西部の城郭、康居ではソグドの諸城郭である。大月氏も同じはずで、アム河北岸に王居 ordu があるから、翕侯がいたのは臣屬させた大夏である。ここでも『後漢書』の基づくものは『史記』『漢書』だけであり、あらたな資料を參照できた證據はない。

『後漢書』が五翕侯の中で高附を都密に換えたのも基づくところが明らかでない。しかし豫想できるのは、班超班勇のころになって都密が發展して有力地になっていたこと、班超班勇當時に高附と音寫する場所は、『漢書』の大月氏五翕侯の地とは異なった場所であったこと、このふたつの情報が『後漢書』編集時點において多分存在した。それで、高附を止めて、都密とした。これらの情報は『後漢書』に先立つ『後漢紀』にもない。都密は普通いまのテルメズ Termez だというが、テルメズはアム河北岸である。大夏は南岸地方である。大月氏の五翕侯は大夏にいるという『漢書』の記事に悖る。矛盾を避けるためには、都密をテルメズ以外の場所に當てるか、『後漢書』編集時代（四二〇－四七九）には大夏の分別ができなくなっていたかである。

五翕侯の記事が『史記』にあらわれないことから、マルクヴァートなどは翕侯が設置された時期なるものを考え出し、それを張騫が大月氏を去ってから前漢末まで、卽ち前一二八年から紀元後八年までの間とし、この時間に大月氏はアム河を南渡して國都を監氏に定めた、とする。[84] 先述のように、大月氏南渡して監氏に都を變えたというなら、その證據が要る。『史記』には、大月氏は大宛を通過してアム河の北岸に至って幕營を張り、河向こうである南の大夏を服屬させた、というだけだからである。『漢書』は大夏の條で、そこに大月氏に服屬する五翕侯がいる、といっている。思うにマルクヴァートはこれだけに基づいて解釋し、服屬させたばかりの大夏を放っておき、時を經て渡河し、南岸の大夏に翕侯を置

いた、ということを推量したのである。征服直後に被征服地の有力城郭の主に翕侯を授けて行國の政治組織の中に土着王（翕侯）を組み入れなければ、かれらの征服とは何なのであろう。『漢書』に『史記』の組み替えがあることを白鳥は認識していた。しかしそれでもなお、大月氏が「遊牧狀態を脫却して、城郭生活に慣化せるに因」って、『漢書』では大月氏が監氏城を國都としたとするのだ、と。いかにしても河の北から南へ大月氏が移ったとしたいのである。[85] 行國という生活形態を簡單に城郭生活に切り替えられるとはおもえない。

四　丘就却の編年

上述に續く『後漢書』大月氏國傳は、前史にはない新情報を掲載する。貴霜翕侯の丘就却が他の四翕侯たちを倒して翕侯から王となり、貴霜國を旗揚げしたという、漢文資料上の丘就却（*Kiu-dzuw-kiak）は、貨幣碑銘にあらわれるクジュラ=カドフィセスと類似するので、同一人物と考えられている。[86] 一九九三年發見のラバタク碑文は、クジュラ=カドフィセスからカニシカまで四代が血脈一系だと述べている。カニシカの父がヴィーマ=カドフィセス、祖父がヴィーマ=タクトゥ（ないしヴィーマ=タクト）、曾祖父がクジュラ=カドフィセスとし、クジュラ=カドフィセスはクシャーン朝初代の帝王である。[87]『後漢書』大月氏國傳も同樣に、クシャーン朝を立てた始祖を丘就却とする。ラバタク碑文は、クジュラ=カドフィセス卽ち丘就却という從來の同定に根據を與えた。[88]

クジュラ=カドフィセスの年代は專ら貨幣學碑銘學の成果に依ってきた。そうして得た年代は取りも直さず丘就却の年代と受け取られた。漢文資料のみによって丘就却の年代を考えることはおそらく頭から不可能と斷定したか、これまで何の檢討もない。しかし貨幣や碑銘の資料が短小且つ孤立的なのに較べて、漢文資料は貴霜に關する記錄としてははるかに

記述的で分量がある。しかも大月氏については、貨幣や碑銘はなんの手がかりも與えない。使い古されたはずの漢文資料を先ず注意深く見直し、先人の讀みを原資料と對比して檢討し、それに新出考古資料などを宛がって見なおすことは必要である。

漢文資料から丘就却の年代を導き出すために必要な條件は、『後漢書』大月氏國傳の「後百餘歳」以下の記事を信頼することと、大月氏がいつアム北岸に到達したのか、その年代である。後者については桑原隲藏やフランソワ=ティエリの解答が正鵠を得ているので、それを若干補足して使う。卽ち、

（1）張騫の歸國が元朔三（前一二六）年で、往復十三年を費やしているから、かれの大月氏向け出發は前一三八年である、と、桑原は言う。

［補足］張騫は南山沿いに歸還せんとして匈奴に捕捉され、軍臣單于の死に乘じて逃亡、單于の死は元朔三年冬である。『通鑑』は三年に繫げる。張騫の歸國は前一二六年末か、前一二五年はじめで、十三年前とは前一三九年末か前一三八年はじめとなる。ティエリは前一三八年三月とする。[89]

（2）張騫は隴西（現蘭州の南）を出た直後に匈奴に捕まった。捉えた單于が張騫にいった。「月氏は匈奴の北に居る…」と。[90] これから判るのは、大月氏が前一三八年ごろに、アム北岸ではなく、河西通廊以北のいずれかの牧草地帶に居たことを示唆する。アム北岸地方へ移るのはこれ以降である。

［補足］桑原によれば、匈奴は老上單于時代（前一六九年から一〇年ほど）に月氏を攻略してからずっと甘肅東部を占據していたはずである。よって匈奴の北なる月氏とは、甘肅東部から牧地を失って移動したのち、塞種を追い出して占據した土地に居た大月氏である。月氏はもともと甘肅東部で弱小の行國烏孫を西隣としていた牧民であったが、烏孫（主は難兜靡）を攻殺して土地を併合した。烏孫は匈奴の中で保護され、いきのびる。その後匈奴は強大になり、月氏を破滅させたので、

本派、卽ち大月氏は、ひとまず行國塞のいるところへ移っていってこれを追い出して居着いた。餘の月氏は今の祁聯山脈の南、青海の西方に羌と共生殘居した。

張騫が匈奴に虜囚であった時代、月氏は匈奴の北に居たということを先述した。牧民として生活できる自然環境で、それが甘肅回廊より北方であるなら、天山北麓でも甘肅回廊から一番近い牧地であったであろう。なお當時の月氏王は老上單于に殺害された月氏王の、妻であった。張騫が出發した時代、甘肅から天山の向こう側に至る廣大な地域の行國勢力は手前側に匈奴、その向こう側に月氏（つまり祁聯山脈南に居殘った小月氏に對しは大月氏である）が居た。烏孫はといえば甘肅において月氏に掃討されて主を失い、匈奴のなかに保護されて居た。烏孫の舊主難兜靡の息子（資料には昆莫）は、單于の認可を受けて仇敵大月氏を舊の塞の地から驅逐して烏孫を再興する。その烏孫は以來その住地にずっと居ることになり、『漢書』はそれが冬營のイリ河上流から夏營の熱海西南山中ナリン上流域までであったことを隨所に示唆している。資料から知られるもっとも古い天山山脈北麓東部の行國は塞、大月氏、烏孫の順に變わっていったことになる。研究者はだれもが、月氏が甘肅からイリ谿谷に移動したことを恰も史書に明述あるように平氣で記述するが、實際史書には記錄がないのである。なぜ大月氏がイリなのか。そこに遊牧國家として定着した烏孫の居所が漢側の軍旅をはじめとする記錄から判明し、それに行國同志の角逐を當て嵌めることによって月氏のイリ居住を知るのである。

この角逐の最終場面が、烏孫に追い出された大月氏の大夏方面への移動である。榎一雄もいうとおり、その經由地は大宛しか明記されていない。[91] イリ上流域からナリン河上流に居た大月氏は、西へ大宛（フェルガーナ）經由、アム河北方に移動したのであるから、フェルガーナへはナリン河をくだったのではないかと推測できる。そこからアム上流右岸地域に入って幕營を置くが、問題はむしろ大宛からの經路で、これは全然判らない。進入時に大月氏は大夏（アフガニスタン北部）を臣從させた。大月氏は舊主の妻の下に長距離を大移動した果てに、直ちに大夏征服を果せたのであるから、大夏は

脆弱にすぎた。『史記』大宛傳は、大夏が商販に強く戰いを恐れるという。大月氏が甘肅で烏孫を討伐した結果、匈奴が大月氏を襲い、その移動を誘發した。張騫が派遣された武帝時代、前一三八年ごろは、天山北麓において大月氏が塞の舊地に居、烏孫は匈奴の保護下に在り、その匈奴は甘肅全域を覆っていて天山北麓の西方には康居がいたのである。烏孫が匈奴から獨立して大月氏を襲ったのは以上の狀況の時代からさほど降った時期ではない。前一三七年か一三六年である。大月氏が結局アム河上流右岸にまで移る大移動の原因は、烏孫の大月氏攻擊であり、その結果、天山北麓の東方は烏孫の勢力下となり、西方は變らず康居であった。烏孫はアラタウーケトメン Alatau-Ketmen 山脈北麓で、アルマアタ Alma Ata から伊寧あたりまでのまちを含むイリ河上流域を冬營の本據にし、ナリン谿谷を夏營地に持ち、おそらくクチャからヤルカンド附近までのまちを翕侯を通じて牛耳っていた。康居はカラタウーキルギズ Karatau-Kirgiz 山脈北麓で、ジャムブル Jambul、フルンゼ Frunze、トクマク Tokmak のまちを含むチューータラス Chu-Talas 河湧水地帶が本據であり、五小王を通じてソグド地方を掌握し、奄蔡（ホラズム）をも傘下に置いていたのかもしれない。大月氏はアム河右岸に幕營を置き、左岸大夏を牛耳って、その翕侯のうち、極東に配した五翕侯が漢大月氏交通に重大な役割を果たした。

（3）桑原はいう、匈奴に虜囚となって十年餘を過ごした前一二八年頃、おそらく匈奴境域の西方に居た張騫は、漸く大月氏へ向けて逃走することを得、數十日にして大宛に至り、[92] 大宛の助力で西南六九〇里の大月氏へ到着した、と。張騫虜囚時代の少なくとも當初、イリ上流域にいた大月氏は、アム上流域に移っていたのである。移動の年代を求めると、それは前一三八年頃から前一二八年頃の間である。桑原は大月氏が移ったさきをソグドという。ソグドもアム河北岸といえば言えなくもないが、そこが大夏だ、トハーラだというのではおかしなことである。北岸というにはあまりにも漠然としてソグドは廣大であり、正しくはデルベンド（鐵門）以東のアム上流北岸地方であることは、先述のとおりである。『史記』大宛傳によれば、月氏はアム上流域に居着いて安逸、既に漢と共に匈奴を討つ環境にない。張騫は大月氏の意志を把握で

きずに歸國した。[93] このような大月氏環境を考慮した桑原は、大月氏のアム上流域移住が張騫到着寸前ではありえず、到着からかなりの時間を經ていたと觀察し、張騫虜囚期間の初期にはまだ、大月氏はイリ上流域からナリン上流、つまり匈奴の北に居たが、そののち早くにアム上流域に移動していたとみる。[94] これはかなり重要な指摘である。

さて『後漢書』大月氏國傳の「月氏爲匈奴所滅。遂遷於大夏。分其國爲休密雙靡貴霜肸頓都密。凡五部翕侯。」に續くのは以下の文章である。

後百餘歲。貴霜翕侯丘就却攻滅四翕侯。自立爲王。國號貴霜。王侵安息。取高附地。又滅濮達罽賓。悉有其國。丘就却年八十餘死。子閻膏珍代爲王。復滅天竺。置將一人。監領之。月氏自此之後最爲富盛。諸國稱之皆曰貴霜王。漢本其故號。言大月氏云。[95]

いまここに記された「後百餘歲」の起點は、前文からの續きの意味で、「大月氏が匈奴に滅されて遂に大夏に遷った」時點である。桑原の所說と筆者の補足とを以てすると、大月氏のアム上流域移動は張騫が捕らえられてすぐではないから、前一三〇年代の中ごろ、卽ち前一三六、一三五年ごろであろう。貴霜翕侯から貴霜王への變化という、中央アジア西部における大事件は、それから約百年を引いたほどのころ、前三六、三五年ごろであったにちがいない。この年代は他の資料に依って確かめられる。

卽ち懸泉驛亭出土木簡上に記された大月氏の翕侯名とそれに關聯する紀年が鍵である。最も遲い年次は翕侯が存在する下限とみてよいから、その年次まで某々翕侯が公的に存在したといえる。貴霜翕侯の名は出土木簡上になかったけれども、貴霜は他の翕侯を攻滅して貴霜王を稱したのであるから、貴霜が獨立したあとは、翕侯號はすっかりなくなった。大月氏は翕侯すべてを失った。よって、翕侯號と紀年を兼備した木簡のうちでもっとも新しい紀年が重要である。この年次こそ

丘就却が獨立した上限年代を示すからである。

木簡を例示する。木簡番號や釋文は張德方による。[96]

一簡（V92DXT1210③：132）には、上方に三行にわたって、「使大月氏、副右將軍、史、柏聖忠。將大月氏雙靡翕侯使者萬若山、副使蘇贛。皆奉獻言事詣在所。以令爲駕一乘傳。」（大月氏に使いする副右將軍で、史官である柏聖忠は、大月氏雙靡翕侯の使である者萬若山と副使の蘇贛をひきいる。皆皇帝のところで貢ぎ物を奉上する。よって一頭立ての馬車をつくらせる。[97]）とあり、同簡同面の下方には、「永光元年四月壬寅朔壬寅。敦煌太守千秋。長史章。倉」長光。兼行丞事。謂敦煌。以次爲駕。當［舍］傳舍」。如律令。四月丙午過東。」（永光元年壬寅朔壬寅に、敦煌の太守千秋、長史の章、倉長光は、丞事を兼行し、敦煌に謂う。驛毎に順次馬車を出し、宿泊を公用宿舍とすること、きまりどおり。四月丙午に東へ過る。）と。また以下の一簡（II90DXT0216②：702）は、遺物の寫眞は不鮮明であるが、釋文として四行に書き出されている。それをそのまま移寫すれば、次のとおりである。

（1）□□□遣守候李□送自來大月氏休密翕侯」
（2）□□□國貴人□□□□□□彌勒彌□　（3）建昭二年三月癸巳朔辛丑敦煌大守彊長史□」
（4）□□□□□烏孫國客。皆奉獻詣」
（5）　三月戊申東　（6）守部候脩仁行丞事謂敦煌。以次爲駕。如律令。」

（1）（2）（4）（5）の四行は簡上半部、（3）（6）は下半部に分けて書かれたのである。和譯は次のとおりである。

（1）□□守候の李□に、自來の大月氏休密翕侯　（2）□□□國貴人□□□□□□彌勒彌□　（4）□□□□□烏孫國の客を送らせる。みな朝貢に皇帝の所に行く。
（3）建昭二年三月癸巳朔辛丑に敦煌大守の彊、長史の□　（6）守部侯の脩仁が丞事を行い、敦煌に謂う。驛毎に順次馬車を出すこと、きまりどおり。（5）三月戊申東へ進んだ。

このほかにも大月氏副使ほか、大月氏を記錄する木簡がみいだされるが、このふたつの木簡は、雙靡、休密兩翕侯とかれらが朝貢に來た日付が現れることで重要である。上例は大月氏雙靡翕侯の例であるが、雙靡はマストゥージからチトラール地方で、雙靡翕侯はそこを支配した翕侯であり、休密翕侯はワーハーン東半を治める。『漢書』では翕侯が漢で實際にどうよばれたかを示していないが、木簡では「大月氏雙靡翕侯」「大月氏休密翕侯」などと稱され、大月氏の翕侯なら必ず大月氏付きで記錄され、他の行國からの翕侯ではなく、ほかならぬ大月氏であることを鮮明にして、こう名づけられていた。この呼び方から、ほかの行國からも翕侯を稱する使者が往來していたことが豫測される。木簡にこう記錄された以上、某國の翕侯の呼び方としては「大月氏某々翕侯」というのが正式呼稱であったのであろう。また大月氏の翕侯は大月氏自身の副使とともに漢に到來することもあり、また大月氏と關係なく、翕侯獨自でも來た、つまり「自來」の使節もあった。大月氏のみならず、康居に服屬する五小王のうち蘇薤王の使者姑墨も、康居王の使者楊佰力と行をともにし、來着していることもまた興味深い。[98]

發表された出土木簡の中には、殘念ながら「大月氏貴霜翕侯」は發見されていない。しかし、史乘初見の「大月氏雙靡翕侯」「大月氏休密翕侯」といった新出の呼稱は、『後漢書』大月氏國傳讀解に新鮮な手がかりをあたえてくれる。貴霜翕侯が他の翕侯を攻破して自立したとき、國々はみなこれを貴霜王といったと、『後漢書』大月氏國傳はいう。大月氏の羈縻から離れて「自立」したから貴霜王、つまりKušān šāh と呼んだのである。周邊のひとたちは實情をよく知っていただけにそう呼んだのである。ところが漢だけは「その故號」に基づいて大月氏とよんだ。「故號」とは、漢簡中に公稱する「大月氏某々翕侯」であたかもしれないし、そうなら貴霜は、「大月氏貴霜翕侯」であった。自立したのであれば、もはや翕侯ではない。よって漢としては故の翕侯號を取り去り、「大月氏」と元のように呼ぶことにしたのである。また別の見方もありうる。『後漢書』大月氏國傳中の貴霜王獨立の記事は、大夏にあって大月氏に羈縻されていた貴霜翕侯が他

の翕侯を攻滅して自立したのであるから、大月氏國内の政變ともみられる。漢はこのように認識したのであろう。先述のように、漢代の中央アジアにおいて翕侯が行國の最高權力者と密接な行動をとって行國の政治行動や政策に組み込まれていたとみるなら、少なくとも外見には一體行動とみられる狀態にあったから、漢がこれを大月氏の内訌と認識したとしても別に不思議ではない。内訌ゆえに漢は貴霜王が支配者になったあとも、その國を舊來どおり大月氏國と呼んだのは至極當然である。周邊諸國がなんと呼ぼうと、それが漢の認識であるからそう呼んだのである。漢は西域諸國とやがて頻繁な直接交易を行うようになったから、月氏ならぬ貴霜に替わったことは十分に知ったはずである。貴霜の獨立以後大月氏がどうなったかを傳える資料はないから、その意味で大月氏は實質的に歴史から消える。しかし、漢では時代が下ってもなお恒に月氏大月氏の呼稱を止めなかった。北魏代になって、現地資料ではキダーラ=クシャーンがあらわれ、中國もこれを寄多羅月氏と呼び、寄多羅貴霜とはよんでいない。唐に至ってもなお、トハーリスターンに都督府を貼り付けるのに月氏名を以てした。一方佛敎側でさえも譯經においてトハーリスターンを月氏國と呼ぶことがあったことは、前に觸れたシムス-ウィリアムズの言うとおりである。「月氏」は、『漢書』以後雅號化したというべきである。

桑原は、「貴霜王國を建ててから、貴霜王國の彊域が大月氏のそれと略同一である故、支那の記錄にはこの貴霜王國を依然大月氏と稱したけれども、これは習慣上又は便宜上のこと」であるとして、さほどここを深刻に受け止めていない。[99]「貴霜の彊域が大月氏のそれと略同一である」ことを記す文獻の證據はなく、考古學上もまたあるはずがない。交易の三叉路といった要衝において、强盛となったクシャーンが大月氏を打倒するに至った。大月氏、貴霜の交替事件である。つまり大月氏國内の事件だと漢が認識したというのに盡きる。付け加えると、『後漢書』大月氏國傳のこの段落は、貴霜を民族上大月氏人だとする根據に引用されることがある。「周邊諸國がクシャーン王國とよんだのに、漢だけ大月氏とその故號でよんだ」のは、かくのごとく「大月氏は貴霜」の證據にはならない。

さて、上述の木簡は、永光元年、前四三年に雙靡翕侯が大夏に存在したことを傳える。大月氏に使者として派遣された柏聖忠が大月氏雙靡翕侯の使いである者萬若山を携えてもどってきたことを記錄する木簡に永光元年の年紀があるからである。同様のことが別の一簡にもいえる。大月氏休密翕侯の使者たちを漢の李某が内地へ送っていくことを記している。それは建昭二年（前三七年）三月のことであった。この木簡は、上例よりもなお一層時間をくだって、翕侯が健在であったことを示している。いまのところ、これ以後懸泉置遺迹出土のいかなる木簡にも「大月氏某々翕侯」は現れない。したがって大月氏麾下の翕侯は前三七年までは存在が確認される。すなわち貴霜翕侯丘就却の獨立は、多分前三六年以後の事件である。この事件を『後漢書』は大月氏の大夏征服より百年餘りのちのこととしているから、逆に遡って、大月氏がアム北岸へ移動したのは前一三七年以前ではないのであり、桑原の豫測は正當だったのである。さらに、張騫の大月氏到着は前一二八年であるから、その時點で大月氏はアム上流域到着以來既にかなりの時間がたっていた。とすると、その百年後である前二八年は、丘就却獨立のかなり緩い下限である。ずっと以前に本當の下限があるはずである。『後漢書』にいう「大月氏の大夏征服後百餘年」におけるクシャーン朝創開は前三六年と前二八年の間になる。前二八年であまりに遅いなら、前三六年か前三五年をクシャーン朝創開とみることも可能である。そして、（1）丘就却獨立の年令を二十歳から三十歳の間のある時期と假定する。これに、（2）『後漢書』にいう沒年齡八十餘歳を加味する。すると、丘就却の歿年は、前三五年に二十歳で獨立だと紀元二六年、二十五歳で獨立だと二一年、三十歳で獨立だと一六年。丘就却の死は紀元後の一六年と二六年の間である。前三五年は獨立年次としてこれよりも遅くはなりえないので、丘就却はせいぜい生きて西暦二六年までである。獨立年齡を若くし、それとともに獨立年次を遅らせていくほど、沒年代は次第に遅くなるが、それは現實的ではない。

この年齡年代の枠組みによる歿年代の幅は、現今貨幣學の多數意見となっているクジュラ=カドフィセスの年代と實は

おおきく乖離する。貨幣學の多數派の見解では、貨幣型式からみてクジュラ=カドフィセスはゴンドファーレスGondophares に先行しないといい、またタフテバーヒー Takht-e Bāhī 銘文には、ゴンドファーレス在位二六年目が一〇三年に當る、と記すという。一〇三年がアゼス紀元に基づくものであるとすれば、ゴンドファーレスは西暦四五年を下らない。よってこのような資料に基づく解釋をよしとする研究者にとっては、クジュラ=カドフィセスは四五年以降のひとである。この枠組みはゴンドファーレスとの前後關係を決定したラプソン E. J. Rapson やクヌーヴ Sten Konow 以來の編年であって、[100] クジュラ=カドフィセスは、マクダワル David W. Mac Dowall によると四五年以後であり、[101] エリントン Elisabeth Errington とかクリブ Joe Cribb によれば四七年から七九年である。[102] 前世紀末ハリー=ファルクはカニシカ卽位一二七年説を四世紀のインド側資料を解析して改めて唱えた。二世紀初頭説であるこの見解は、マーシャル John Marshall による一二八年説と近いこともあって、[103] カニシカの年代は大體その邊だろうといった現今の風潮もなしとはしない。そんな事情から大方に認知される勢いである。しかしそれで本當によいのか。それは各研究者がそれぞれ檢討の上できめる必要がある。かつてギルシュマン Roman Ghirshman がカニシカ卽位一四四年を説いたときには、自身の發掘したベグラームの層位に基づいた貨幣の檢討に基づく編年のように見せかけたけれども、實は單に全層出土貨幣をごちゃ混ぜにしてそれを分類しただけであり、層位發掘の結果が貨幣分類に活かされることなく、それとは無關係な檢討であった。このような結果になぜか贊同するひとが多かったのは、ベグラーム發掘報告を精査することなく、ギルシュマンが示す歷史とのすっきりした關係にすっかり幻惑されたからである。しかし今それを捨てて、次は新鮮明解のファルク説を受け入れようとするのはなぜか。兩者の編年差は二十年もあるが、この編年差をどう始末するのであろうか。貨幣學上のクジュラ=カドフィセス年代とカニシカの卽位年との間に、SOTER MEGAS（大救世主とだけあり王名がない貨幣）をヴィーマ=タクトゥの發行としてこれを認めても、二人の王がすっきりはいりうるのであろうか。それだからカニシカが二世紀はじめに

登位したとはいえない。

本論の結論は、上引のゴンドファーレス編年と相容れない。また一方クジュラ=カドフィセスの死亡の下限年代西暦二六年からカニシカ登位一二七年まで百年を數え、そこにラバタク碑文に記錄されている二人の王（ヴィーマ=タクトゥとヴィーマ=カドフィセス）が入るとすると、カニシカ二世紀説にすりあわせることも無理である。ところが、既出のカニシカ卽位説でもうひとつ有力な年次となるのが、第二次大戰直後ファン=ロウヘイズン=ドゥ=レーヴ Johanna-Engelberta van Lohuizen-de Leeuw が提起し、いまやジェラール=フュスマンが主張する七八年説である。[104] クジュラ=カドフィセスが二六年以前のひとという編年はカニシカ卽位一世紀説には利がある。私はカニシカ卽位年を新たに提唱するのではなく、クジュラ=カドフィセス生存の下限を二六年とすることが漢文資料の檢討結果として正しいなら、これまで提唱されたカニシカ卽位年のうちで七八年説は有力候補であるということを言いたい。[105]

貨幣學においても實はラプソン以來のゴンドファーレス編年に疑問が出ていないわけではない。その疑問に基いて提出されたクジュラ=カドフィセスの統治年代として、シニア R. C. Senior による前二五年ー後二五年説、[106] ファン=ロウヘイズン=ドゥ=レーヴによる前二五ー後三五年説、[107] そしてフュスマンによる大約西暦二〇年がある。[108] 漢文史料を基に考えると、丘就却は紀元後の二六年を越えて生きたひとではないから、クジュラ=カドフィセスが丘就却であるなら、これらの貨幣學見解は本結論に近づいている。しかし、細部では、ファン=ロウヘイズン=ドゥ=レーヴ年代は妥當ではなく、一方、ゴンドファーレス貨幣を一世と二世とに分類し直し、ゴンドファーレス一世、クジュラ=カドフィセス、ゴンドファーレス二世と續くとするのは、シニアであり、注目に値する。シニアは、ゴンドファーレス二世がタフテバーヒー碑文にあらわれる王であるとしている。フュスマンは自説にシニア説を援用している。從來どおりの分類に於けるゴンドファーレス貨幣とクジュラ=カドフィセス貨幣の前後關係を見直すシニアの存在は、これらの貨幣を根本的に再檢討する餘地が貨幣學

碑銘學に十分ありうることを示している。今後の檢證や論爭が期待される。（二〇一七年四月）

注

（1）丘就却とKujula Kadphises、次代閻膏珍とVima Taktu、この二對の王名の音としての對應關係についてはSims-Williams 1998（pp. 89-90）に興味深い所見がある。なおシムス-ウィリアムズは當初Taktuという讀みは不確かだとしたが、その後の論文ではそれが確定したように使い出している。別名を考えるひともいる。

（2）そのような翻譯を集成したものが最近のFalk 2015, pp. 31-152である。

（3）もっともこのような情報の受け止め方は翻譯文ではなく漢文を分析しても當然起こりうる。例えば、內田吟風一九七二を參照。フランソワ=ティエリFrançois Thierryは月氏、クシャーン關係およびそれらと關わる漢文資料を總ざらいし、佛譯した。漢文資料に單語の意味をもふくめてどう問題がおこるか、問題を解決に導きうるかが檢討されている。漢文資料を扱って大月氏、クシャーンの關係を解く場合、本來の姿の檢討である。それでもなお大月氏貴霜同一說にとらわれる（Thierry, p. 461）。

（4）史學研究會明治四三年（一九一〇）講演の草稿を補訂し、『史林』の前身『續史的研究』（大正五年：一九一六）に發表し、それは逝去後に『東西交通史論叢』（昭和八年：一九三三）に入り、最終的に『桑原隲藏全集』第三卷（岩波書店、昭和四三年：一九六八、二六一―三三五頁）に收められた。このようにはじめから印刷媒體ではなく、「張騫の遠征」と題する講演の、しかも途中で、本論からそれた恰好で觸れた桑原の意圖を察するに、この問題は漢文讀解としては至極當然のことで取上げて問題にするほどのことではないと認識していたのではないか。

（5）「月氏及び貴霜に就いて」（『史學雜誌』第四卷九號、一九三〇）。『羽田博士史學論文集』上、歷史篇（一九五七）、五三八―五六一頁に再錄。Haneda 1933. Pelliot 1934, pp. 38-40.

（6）內田吟風（一九七二B、九四―九六頁）の八證とは、資料證據ではないから意味がなく、よって論破は無駄である。餘太山（一九九〇、二四―二五頁）を參照。

（7）江上波夫一九八七、二三三―二四二頁。

（8）Sims-Williams 1998, pp. 89-90.

（9）Falk 2001, pp. 121-136（Falk 2013, pp. 433-448）前世紀末までの諸說については山崎一九九九を參照。

（10）van Lohuizen-de Leeuw 1949. Fussman 1986, 1990, 1998.

（11）もっとも最近Fussman（2011, pp. 255-256）は漢文資料は何の證據にもならないといったが、かれが問題にしたのは『後漢書』西域傳情報の下限年代なので、ティエリ（Thierry 2005）がいう漢文資料の問題とは根本的に異なっている。

（12）Bosworth 2001, p. 224.

（13）Humbach 1966. Sims-Williams 1998.

（14）徐松一九三七、三九頁。

（15）『漢書』卷六一張騫傳。大月氏攻殺難兜靡。奪其地。人民亡走匈奴。子昆莫新生。傅父布就翕侯抱亡。置草中。爲求食。還見狼乳之。又烏銜肉翔其旁。以爲神。遂持歸匈奴。單于愛養之。

（16）翕侯烏孫大臣官號。其數非一。亦猶漢之將軍耳。而布就者亦翕侯之中別號。猶右將軍左將軍耳。非其人之字。翎與翕同。

（17）その意味でティエリ（Thierry 2005, p. 519, fn. 196）が「侯」をmar-

quis と譯したが、それが五等伯の最上位だとしたら不思議な譯語である。「侯」は英譯としては noble が當ろうか。「翁侯」の記事中、それをもし侯と略稱したなら、必ずそういった例が出るはずだが、出ないのは、ティエリが marquis と譯したような、略稱としての「侯」が他と混同される心配があったからであろう。

(19) 復尙楚王解憂。生三男兩女。長男曰元貴靡。次曰萬年。爲莎車王。次曰大樂。爲左大將。長女弟史爲龜茲王絳賓妻。小女素光爲若呼翁侯妻。

(20) 萬年は直接烏孫から莎車へ送り込まれたのではない。『漢書』莎車國傳によると、「子の無い莎車王は烏孫公主の子である萬年を氣にいっていて、王が死んだとき萬年は多分質子として漢にいたが、莎車の國人は漢にそのことを任せようと計り、また烏孫の氣も引きたかったので、直ぐに上書して、萬年を莎車王にと請うた。漢は之を許して使者奚充國に萬年を送らせたが、莎車王としての萬年はこれが暴君で、國民は納得しない。そこで死んだ莎車王の弟呼屠徵は萬年を殺し、漢の使者も殺して自ら立って王となり、諸國を纏めて漢に背いた……」とあって、莎車王は結局漢が呼屠徵の子を王に立てて、その始末をした。莎車王だけについては烏孫の豫定通りにはなっていない。

(21) 烏孫國傳に「初肥王翁歸靡胡婦子烏就屠。狂王傷時驚。與諸翁侯俱去。居北山中。揚言母家匈奴兵來。故衆歸之。後遂襲殺狂王。自立爲昆彌。」なお、本文中の狂王とは、軍須靡と匈奴妻の間の子で、名を泥靡と言い、翁歸靡が死んだので昆彌となった。

(22) 昆彌自將翁侯以下五萬騎。從西方入。

(23) 時大昆彌雌栗靡健。翁侯皆畏服之。

(24) 久之大昆彌翁侯難栖殺末振將。末振將兄安日子安犂靡代爲小昆彌。

(25) 遣使者至烏孫。先迎取聘。昆彌及太子左右大將都尉皆遣使。凡三百餘人入漢。迎取少主。

(26) 西域都護延壽副校尉湯。承聖指倚神靈。總百蠻之君。檻城郭之兵。出百死入絶域。遂踏康居屠五重城。搴歙侯之旗。斬郅支之首。縣萬里之外。揚威昆山之西。なお、王先謙は通鑑の胡注ほかによって、五重ではなく三重を是とする。本文の譯はこれに從った。

(27) 會康居王數爲烏孫所困。與諸翁侯計。以爲匈奴大國。烏孫素服屬之。今郅支單于困阨在外。可迎置東邊。使合兵取烏孫。以立之。長無匈奴憂矣。

(28) 白鳥庫吉一九七〇、八六―八八頁。

(29) 王先謙は「康居有小王五」に徐松を引いて注し、小王はまた副王ともいったという。『漢書』陳湯傳にある「康居副王抱闐」の抱闐は奥腱（康居の五番目の小王）のことであるからだという。

(30) 『史記』標點本、二九〇七―二九〇八頁。

(31) 『漢書』標點本、三七六八頁。

(32) 而漢亦亡兩將軍三千餘騎。右將軍建得以身脫。而前將軍翁侯趙信兵不利。降匈奴。武帝紀六は夏四月のこととする。

(33) 趙信者故胡小王降漢。漢封爲翁侯。

(34) 『史記』標點本、二九〇七―二九〇八頁。單于既得翁侯。以爲自次王。用其姉妻之。與謀漢。「自次」を、『史記會證』は胡語だと、『史記正義』が漢語として解釋したのは誤っている、と。ここでは胡語だと何を意味することになるのか判斷できないので、『正義』が『漢書』師古注によって解したことを是とし、「以て自次の王となし」と解した。

(35) 趙信以匈奴相國降爲侯。武帝立十八年。爲前將軍與匈奴戰。敗降匈奴。

(36) 『史記』標點本、一〇二七―一〇二八頁。

(37) 『漢書』卷一七、景武昭宣元成功臣表第五では、元光四年十月壬午とする（『漢書』標點本、六二四頁）。

(38) スィムス-ウィリアムズ（Sims-Williams 1998, pp. 229-230）曰く、「クシャーンが使った翁侯 yaβru は月氏語というより、元はむしろ中國語である。一方漢文資料にはクシャーンが五の月氏族のうちの一であるとするから、クシャーンという名は純正の月氏語である。同樣にクシャーンの王名 Kujula Kadphises, Vima Taktu, Vima Kadphises に

ある「子音の聯續」dr̥、kt（consonant clusters）は元々バクトリア語にはない。一方、Tukharistan という名稱はエフタル時代、六世紀の交になってはじめて檢證される名前で、明らかにトハロイ（Skt. Tukhāra）に由來し、鳩摩羅什は Tukhāra を月氏と譯している」。上の下線部はいかなる漢文資料にも認められない記事である。もともとかれは大月氏クシャーン同一說の信者なのだろう。こう考えないと、dr̥、kt 子音群は月氏語だということにはならない。しかしクシャーンが使っていたバクトリア語がクシャーン本來の言語でなくてもよい。クシャーンの本來の言語はバクトリア語以外であって、だからクシャーンは大月氏だというのであろう。本來の言語を忘れて地域共通の言語に變わってしまう例もある。カーブルにいたザーヒルシャーを始めとする舊アフガニスタン國の王族は Pashtū 語を本來話すべきパシュトゥン族だが、かれらはカーブル在住のタジクやハザラ同樣、ダリー語しか話せなかった。また、鳩摩羅什が Tukhāra を月氏と譯しているのは佛典の譯語の問題である。

(39) *Ḥudūd al-ʿĀlam*, p. 108, no. 68（Khulm lies between Balkh and Tokhāristān in a steppe at the foot of a mountain.）

(40) 活國＝**war*=Qalʿa-ye Zāl の比定については、桑山正進一九八五Aを參照されたい。『慈恩傳』は統葉護可汗を單に葉護可汗と呼ぶ。しかし葉護可汗は統葉護可汗ではなく、『大唐西域記』卷二縛喝國納婆僧伽藍の條にあらわれる肆葉護可汗だとするひとがいる。『慈恩傳』の葉護可汗は、玄奘當時高昌からこの地方まで、中央アジア東半を被う大勢力を誇り、特に高昌麴文泰との關係が深い西突厥の盟主であって、統葉護可汗そのひとを措いてほかにはかえることができない人物である。『西域記』卷二縛喝國に、肆葉護可汗は葉護可汗の子と說明するところから、統葉護可汗の子と考えられる。すると、唐史に記錄される咥力特勤、すなわち乙毘鉢羅肆葉護可汗だということになる。莫賀咄侯屈利俟毘可汗が甥の統葉護を貞觀二年四月から八月の間に暗殺して大可汗を自稱すると、かれと統葉護可汗の息子肆葉護可汗との間で伯父甥の紛爭となり、貞觀四年、後者が金山で屈利俟毘可汗を殺して大可汗となるまで、二年近い內紛は部族間抗爭を惹起した。肆葉護可汗には收拾能力なく、結局かれは父の根據地であった千泉地方へ孤騎をもって歸り、貞觀六年にそこで死んだ（舊唐書卷一九四下、通鑑卷一九三、一九四參照）。肆葉護可汗は西突厥を瓦解に至らしめた張本人であって、そんなかれの時代に玄奘が西突厥の中央アジアを無事に通過できたわけはない。『慈恩傳』が描寫するような、大可汗の威勢を肆葉護可汗には到底望めない。なお注意すべきは、バルフのナヴァ=サンガーラーマ *Nava Saṅghārāma を襲って急死した肆葉護可汗のはなしだ。この話は史書の記錄と相容れないどころか、カライェ=ザールには tardu šad ないしは Tokhara yaβru の幕營があって、バルフはその所部であると『慈恩傳』は傳える。それを差し置いて、Tashkent 方面にいたはずの肆葉護可汗がバルフを急襲できるとはおもえない。ナヴァ=サンガーラーマを襲うつもりで急死した肆葉護可汗のはなしは、統葉護可汗なきあとの內亂時代、貞觀二年から六年までの狀況が多分に反歷映した說話にみえる。『西域記』の編者辯機が玄奘から受け取った資料にこのはなしがあったとするなら、それは玄奘が歸途に傳え聞いたはずである。『西域記』は編纂ものだから、說話めいたこの一件を歷史の事實としてすぐさま利用することは憚られる。まず正史にあらわれる歷史上の肆葉護の事迹から『西域記』の記事をみる必要がある。その逆ではない。『西域記』の內容を無闇に同時代の事實として扱うことには躊躇するものである。

(41) 至活國。居縛芻河側。卽覩貨羅東界。都城在河南岸。因見葉護可汗孫王覩貨羅。自稱葉護。

(42) 桑山正進一九九〇、四三八頁以下參照。

(43) みなフルスウェ（Fulsewé 1979, p. 121）やツュルヒャー（Zürcher 1968, p. 365）のように讀むので、本論の考え方は少數派である。江上

波夫（一九八八、二三三頁以降）や小谷仲男（二〇一五、三四頁）を參照されたい。江上は師古注に拘泥したが、小谷は本論と同じ方向である。江上波夫一九八八、二四二頁。小谷は愼重でそれ以上の言説はない。江上が「共稟漢使者。有五翕侯。」と讀んだにもかかわらず、大月氏貴霜同一説を採るのは（同書、二四三頁以降）、資料に依據したからではない。周邊オアシス地方を征服して大帝國をつくりあげる、いわゆる中央アジアにおける「遊牧騎馬民族」（江上用語）と「オアシス隊商都市」（江上用語）との關わり方の通例から外れるという理由からである。最後になって定理をもってすべてをひっくり返すのではなんのために漢文を精讀したのか、わからない。

(44)

(45) Marquart 1901, pp. 242-246.

(46) Chavannes 1907, p. 190.

(47) 白鳥庫吉一九七〇、一〇一―一二一頁。なお内田吟風一九七二A、六一、六二、六九頁參照。なお、白鳥はいわゆる西域史の研究においてマルクヴァートを根底に据えて自説を展開している。

(48) 鉗敦國。故貴霜翕侯。都護澡城。在折薛莫孫西。去代一三五六〇里。人居山谷間。

(49) Pulleyblank 1962, p. 222.

(50) 伽倍國。故休密翕侯。都和墨城。在莎車西。去代壹萬三千里。人居山谷間。

(51) 『唐書』西域傳に、「護密或曰達摩悉鐵帝國。曰護倪。元魏所謂鉢和者。亦吐火羅故地。東南達京師九千里贏。横千六百里。縱狹纔四五里。王居塞迦審城。北臨烏滸河。（中略）顯慶時。以地烏飛州。王沙鉢羅頡利發爲刺史。地當四鎭入吐火羅道。故役屬吐蕃。

(52) 桑山正進編一九九八、一七六―一七七頁。

(53) 『通典』卷一九三、『唐會要』卷九九、『舊唐書』卷四〇、『唐書』卷四三下では顯慶の次の龍朔元年とする。

(54) 桑山正進一九九八、一七六―一七七頁、一八四　胡密（森安筆）の項參照。

(55) 『魏書』には代からの距離として、休密の和墨城までが一三〇〇〇里、雙靡までが一三五〇〇里、貴霜の護澡までが一三五六〇里、胡頓の薄茅城までが一三六六〇里とし、東から次第に竝び、最後の高附は薄茅城の南に在り、代からは一三七六〇里としている。

(56) Curzon 1978, p. 29.

(57) 白鳥庫吉（一九七〇、一一五頁）は Sarigh Caupan（ママ）を休密翕侯の町とみている。

(58) ワフシュとイシュカーシムとは音として類縁でないが、ここで思い起されるのは、いまアム河は上流でアーベ＝パンジュ Āb-e Panj、あるいはダリヤーイェ＝パンジュ Daryā-ye Panj と呼ぶことである。漢代は嬀、『魏書』『大唐西域記』には縛芻として載っている。これをみな *waχš* の音寫と普通いうが、縛芻、縛芻は *panj* とは復原できないのであろうか。護燥をワフシュ waχš と讀んで、縛芻もワフシュと讀めるのであろうか。音韻學に不明なものには判じがたい。グルネ（Grenet 2006, pp. 327-328）は、タジク共和國の現在のワフシュ河がいまアムとかパンジュとよぶ河の往古の本流だという。現ワフシュ河＝舊ワフシュ河の同定には證據を要するが、現ワフシュを傳ってカシュガルへ行く商路はなく、當時はみなワーハーン經由路が普通であったと、白鳥（一九七一、一―四一頁）は、既に一九四一年に結論している。またプトレマイオスに出てくる Komedai と Kumedha が同一の土地であったとしても、休密と Kumedha は別所である。

(59) Chavannes 1903, p. 406. Stein 1907, p. 14. 桑山正進一九九〇、一〇二頁。

(60) 桑山正進一九八五B、一五二―一五三頁。小谷仲男一九六六、三八九―四一一頁。活はよく現クンドゥズといわれるが、『慈恩傳』『西域記』にあらわれた活は河の南岸にあるというから、ずっと内陸に位置する現クンドゥズには當たらない。クンドゥズ北西約七〇キロのカライェ＝ザールの宏大なバーラー＝ヒッサー

ル遺迹こそアム河の南岸に在り、まさしく活にふさわしい。

(61) ターラカーン南部一帯がTakhārと呼ばれる地方であることはあまり知られていないが、Tokhāraとの關聯で注目すべき地名である。

(62) Pelliot 1934, p. 381の脚注參照。

(63) 桑原は全集三、三二五頁、注一〇四で、『後漢書』の「初月氏（中略）凡五翕侯」を「これは『漢書』の記事を省約して、然も無意識の間に、原文の意味を變更せしものに過ぎざれば、獨立せる根本史料と認むべからず。從ってこの記事はその儘に信用しえざることは、今日の學會における定評なり。」と。「今日」とは大正四年（一九一五）であって、當時の定評にもかかわらず、百年以上經ってもなおこの桑原の記事に無頓着な場合が多い。この文中大きい改變は、高附翕侯を都密翕侯に入れ換えたことであろう。いわれるように都密を北岸のテルメズとすると、ここはアケメネス時代から既に南北を貫く要衝であったろうが、せっかく『漢書』に高附とあるところを入れ替えたのは、『後漢書』認識の高附が漢代の高附とは別處であったからではないか。

(64) グルネ（Grenet 2006, pp. 325-341）は五翕侯の一つをテルメズにまで廣げている。テルメズは北岸であって、大夏は南岸にあるのであるから、五翕侯は大夏にいるとする、『漢書』西域傳や荀悅『前漢紀』に悖る。

(65) 桑原隲藏一九八六、二八四－二八五頁。

(66) 『漢書』張騫傳參照。

(67) 白鳥庫吉一九七〇、八九－九〇頁。

(68) 羽田 亨一九五七、五四六頁。

(69) Pulleyblank 1962, pp. 122f.

(70) 小野山 節一九六六、三五九－三六五頁。

(71) 白鳥庫吉一九七〇、一〇〇頁。

(72) 『漢書』における『史記』の組み替えについてはまだある。『史記』大夏が「其東南有身毒國」であるのに、大夏を包攝して記述する『漢書』大月氏國は「南與罽賓接」である。おなじヒンドゥークシュ北麓の地域からみて、かたや身毒、かたや罽賓とはなんなのか。ヒンドゥークシュの東南が身毒、インドだといえば、それにはちがいないが、張騫が大夏で四川の竹杖をみて、南まわりで大月氏と通じうると思った程度が、當時のインド理解である。ここでは大夏東南とはヒンドゥークシュ山脈の東南であって、そこがスィンドSindhuだというのは、名の起こりのスィンド（現インダス）河方面をいったにちがいない。カーブル河下流域からインダス東方といった、つまりガンダーラから精々パンジャーブの一部を指している。上述のとおり大夏を含む大月氏國の東南も身毒のはずである。しかし『漢書』はそれを東南とせずに南といい、身毒といわず、罽賓としたのはなぜか。ヒンドゥークシュの南はカーブル河流域である。『漢書』が東に寄った南ではなく「南」としたのは、カーブル河流域でも上流であるカーピシーを指そうとしたからである。この認識は、大月氏國としての方位が『史記』時代の知識ではなく、『漢書』にはじめて出た情報による證據である。これは張騫歸國以來大月氏方面に行った使者が將來した情報や、前漢宣帝代に烏壘城に設置した西域都護府が入手した情報のはずである。ヒンドゥークシュ南のカーブル河流域は、山脈横斷路のどれが選擇せられるかで、東のガンダーラが交通の要衝になるか、西のカーピシーがそうなるか、決まる。兩傳の、身毒と罽賓はこの情勢の反照である。

(73) Kuwayama 1987, 桑山正進一九九〇、Kuwayama 2006。

(74) Lamberg-Karlovsky 1972, pp. 222-229.

(75) Casson 1989, pp. 11-27.

(76) 二二六年頃作成と考えられている地圖集Peutinger Tablesの一枚に、ムージリスMuziris（現Cranganore）近邊にあったとおもわれる「アウグストゥスに捧げられた神殿」が描かれている。簡單な發掘がクランガノールで行われたが、ローマ人居住の證據は出ていない。但し

ローマ帝國からの人間の居住なくしてそのような神殿が存在しうるか。Smith 1924, pp. 462–463.

(77) Wheeler 1954, p. 167ff.

(78) 『エリュトラー海周航記』*Periplus Maris Erythraei* については、多角的且つ詳細な研究成果である Casson 1989 と Huntingford 1980、最近まで日本語で讀める、唯一の優れた譯書であった村川堅太郎一九四六等を主として參照した。村川一九四六の出版時代に生を受けた蔀勇造教授は、半世紀に及ぶ研究の優れた成果を蔀二〇一五、二〇一六として刊行した。迂闊にも私はその出版情報に疎く、山崎利男、稲葉穣兩教授に教えられ、本論文公刊に辛くも間に合ったことは悦ばしいことである。東西の資料を平等に驅使し的確な判斷に導いて施された注釋と解説において村川を凌駕した、この二册本は、將來永く利用さるべき、内容敍述共に行き屆く優作である。しかし使い勝手の點で利用價値を若干落としていることを否めないと思うのは私一人ではあるまい。優れた多くの地圖や本來なら挿圖というべき「圖版」が分散し、凡例、文獻の略號表が兩册にあり、本來下册に置くべき文獻表が上册にあり、さらにこれらを包括するはずの目次が使用の活字サイズによって不鮮明となるなど、通常ならざる形式は分册によって起こった事態であって、ベテランの編纂者ならずとも少しく配慮あらば回避できた本書の外形上の瑕疵である。なお、本書の凡例は題名を『エリュトラー海案内記』とした理由が述べられているが、原題の直譯で十分であった。

(79) Dehejia 1972, Table II.

(80) 甘肅省文物考古研究所『文物』二〇〇〇年五期、四–二〇頁：『文物』二〇〇〇年五期、二一–四五頁。

(81) Torday 1997, p. 401ff. 竝びにその後注33參照。

(82) これは「時月氏已爲匈奴所破。西擊塞王。塞王南走遠徙。月氏居其地。昆莫既健。自請單于報父怨。遂西攻破大月氏。大月氏復西走。徙大夏地。」（『漢書』標點本、二六九二頁）とあるなかの最後にくる一文である。「月氏はとうの昔に匈奴に破られ、西のかたに塞種の王を擊ったので、塞種の王は南へと逃走し遠く移っていきました。そこで月氏はその土地に住んだのです。（ところでむかし月氏と隣り合わせで甘粛にいた烏孫は、月氏が匈奴の攻撃に遭うずっと以前に、既に月氏に滅ぼされて匈奴の保護下に入り、嫡子である赤兒は匈奴王に愛護されていたわけですが、そのとき赤兒であった）昆莫は成長しておおしくなり、父の怨みに報いんと思い、自分から單于に頼みこみ、遂に西方に大月氏を攻め破ったのでした。大月氏は重ねて西へと敗走して、大夏の地に移動したのです。」ということである。また『漢書』西域傳烏孫國傳に、「烏孫國。大昆彌治赤谷城。（中略）本塞地也。大月氏西破走塞王。塞王南越縣度。大月氏居其地。後烏孫昆莫擊破大月氏。大月氏徙。西大夏。而烏孫昆莫居之。（後略）」とあるのを參照。

(83) Grenet 2006, pp. 330–338. なお、Chavannes（1907, p. 189, fn. 3）は、『後漢書』の「分其國」は誤りとする。

(84) Marquart 1901, pp. 202–203.

(85) 白鳥庫吉一九七〇、九七–一〇一頁。

(86) Pulleyblank 1965, p. 109.

(87) Sims-Williams 1995–96, pp. 75–96, 128–137. Sims-William 1998, pp. 79–92.

(88) ラバタク碑文の血脈がそのまま王統であるかどうかは明らかでない。名前の後ろに付く *shao* は單なる敬稱で、王位なら貨幣銘のように *shaomanoshao* であるはずだとフュスマンは考える（Fussman 1998, 571–651）。尤もな疑問である。

(89) Thierry, 2005, p. 454

(90) 『漢書』卷六一 張騫傳：月氏在吾北。漢何以得往使。吾欲使越。漢肯聽我乎。

(91) 榎一雄一九九三、一一六–一二四頁。

(92) 『漢書』張騫傳：居匈奴西。騫因與其屬亡鄉月氏。西走數十日至大宛。

(93) 『史記』大宛傳：康居傳致大月氏。大月氏王已爲胡（老上單于）所殺。立其夫人爲王。既臣大夏而君之。地肥饒。少寇。志安樂。又自以遠漢。殊無報胡之心。騫從月氏至大夏。竟不能得月氏要領。

(94) 内田一九三八は、『漢書』巻五二韓安國傳の記事を基に桑原説を否定し、月氏のアム上流域移住を前一三〇年代末と斷定した。武帝の元光二年（前一三三年）、對匈奴開戰論者王恢の獻策に、「今以。中國之盛萬倍之資。遣百分之一。以攻匈奴。譬猶以疆弩射且潰之癰也。必不留行矣。若是則北發月氏可得而臣也。」とある。内田はこれを解釋、「王恢は職務上西域事情を熟知したうえで特に北のかた月氏を發しと明言しているので、月氏は朝議があった前一三三年當時まだ北方、つまりイリに居た。だから月氏は張騫の匈奴拘留中の後半に伊犂を去った」と。しかし、「北のかた月氏を發して得て臣たるべし」では通じがたい。内田は「北發月氏」の一句だけに取り憑かれたように見える。當時は張騫未歸還時點であるから「月氏を徵發」することはありえないであろう。一方、王先謙『漢書補注』では劉敞を引いて、『管子』によれば北發は國名だとし、錢大昕（『廿二史考異』）もまた、北發は北狄の地名。よって顔師古は誤りとする。思うに、王恢は、北發と月氏によって北とか西とかの外族を代表して示した。この時點で月氏は既に西に居たのである。内田は、王恢が職務上西域事情を熟知していたという。證據を擧げていない。かれがそんなによく知っていたのなら張騫なんかが月氏に行くことはなかったはずだ。王恢に據って月氏の正確な位置を知ることは無理である。なお内田の當該論文は、肝腎な引用文を原典にあたると、書き寫す際の誤字の多さに驚く。大月氏が鐵門の東なるアム上流域に移住し、南岸一帶の大夏を征服した年次について、それはかなりおおざっぱさばかりが目に立ち、信用できない。

(95) 上引記事の和譯：百年の餘經って、貴霜翕侯丘就却は四翕侯を攻め滅ぼし、獨立して王となり、國を貴霜と名づけた。王は安息(Indo-Parthia)に侵攻して高附の地を取り、また濮達や罽賓（パンジュシールからカーブル河流域までを包攝する地方）を滅ぼし、ことごとくそれらの國を保有した。丘就却は年八十餘で死に、息子の閻膏珍が代わって王となった。再び天竺を滅ぼし、將軍一人を置いてそこを監領させた。月氏はこれ以後最も富み盛え、諸國はこれを呼んでみなクシャーン王 Kušān šāh（貴霜王）といった。漢はそのもとの名前に本づき、大月氏というという。

(96) 張德芳二〇〇四。

(97) 張德芳（二〇〇四、一三七頁）は、「者萬若山」の「山」を次の副使に繫げて、しかも「山」を『漢書』西域傳中の「山國」とみて、山國副使と解した。しかし山國は、『漢書』西域傳によると、戶四五〇、人口五〇〇〇の小國で、焉耆の東南一六〇里にあり、更に東南には鄯善且末があり、山居するとする。山國は大月氏國とは地理上あまりにもかけ離れた土地にある。そのような北道の小國が南道を東進する大月氏國と一緒に、しかも副使だけが來漢するのか。不自然に思え、俄に贊同しかねるので、山は大月氏使者の名の一部とした。

(98) 張德芳二〇〇四、一四四－一四五頁。

(99) 桑原隲藏一九一五、二八九頁。

(100) Konow 1927, pp. 57-63 E. J. Rapson 1922, p. 576ff.

(101) Mac Dowall 2007, pp. 95-117.

(102) Errington and Cribb 1997, pp. 216-230.

(103) Marshall 1914, pp. 973-986.

(104) van Lohuizen-de Leew 1949, pp. 61-65. Gérard Fussman 1986, 1990, 1998 (p. 627ff.).

(105) 桑山正進二〇〇四（一七頁上段）において私は、タキシラの建築の編年を石積み法から試み、擬切石積み建築にはカニシカ貨幣が伴出するが、直前の小ダイアパー石積み建築には伴出しないこと、また後者には西暦七〇年代中期の碑銘が集中することを指摘した。よってカニシカは七〇年代よりかなり遲く登位したと見て、カニシカ二世紀初頭説

に賛意を表した。しかし、私の指摘したことは事實なのであるが、いま再考するに、カニシカが直前の建築期である小ダイアパー時代に遡ることはないとはいえないのである。カニシカがその時期に遡ってもなんら問題がないばかりか、むしろ七八年説にとっては助けである。私はしたがって前論を恥じてこのたびの結論に前論を整合させておく。

(106) Senior 1997.

(107) van Lohuizen-de Leeuw, 1949, pp. 361–376.

(108) Fussman 1998, p. 629.

根本史料

★『史記』大宛傳大月氏

大月氏在大宛西可二三千里。居嬀水北。其南則大夏。西則安息。北則康居。行國也。隨畜移徙。與匈奴同俗。(略) 乃遠去。過宛。西擊大夏而臣之。遂都嬀水北爲王庭。(略)

★『史記』大宛傳大夏

大夏在大宛西南二千餘里。嬀水南。其俗土著。有城屋。(略) 無大王長。往往城邑置小長。其兵弱畏戰。善賈市。及大月氏西徙。攻敗之。皆臣畜大夏。大夏民多。可百餘萬。其都曰藍市城。有市販賈諸物。其東南有身毒國。

★『漢書』大月氏國傳

大月氏國。王治監氏城。去長安萬一千六百里。不屬都護。戶十萬。口四十萬。勝兵十萬人。東至都護治所四千七百四十里。西至安息四十九日行。南與罽賓接。土地風氣物類所有民俗錢貨與安息同。出一封橐駝。

大月氏本行國也。隨畜移徙。與匈奴同俗。控弦十餘萬。故彊輕匈奴。本居敦煌祁聯閒。至冒頓單于攻破月氏。而老上單于殺月氏。以其頭爲飲器。月氏乃遠去。過大宛。西擊大夏而臣之。都嬀水北爲王庭。其餘小衆不能去者保南山羌。號小月氏。

大夏本無大君長。城邑往往置小長。民弱畏戰。故大月氏徙來。皆臣畜之。無大王長。往往城邑置小長。其兵弱畏戰。善賈市。及大月氏西徙。攻敗之。皆臣畜大夏。共稾漢使者有五翕侯。一曰休密翕侯。治和墨城。去都護二千八百四十一里。去陽關七千八百二里。二曰雙靡翕侯。治雙靡城。去都護三千七百四十一里。去陽關七千七百八十二里。三曰貴霜翕侯。治護澡城。去都護五千九百四十里。去陽關七千九百八十二里。四曰肸頓翕侯。治薄茅城。去都護五千九百六十二里。去陽關八千二百二里。五曰高附翕侯。治高附城。去都護六千四十一里。去陽關九千二百八十三里。凡五翕侯皆屬大月氏。

★ 荀悅『前漢紀』

大月氏[大月氏在大宛西可二三千里。居嬀水北。其南則大夏。西則安息。北則康居。行國也。隨畜移徙]。本[與]匈奴同俗。居敦煌祁聯山閒。匈奴老上單于殺月氏王。以其頭爲飲器。月氏乃遠去。西過大宛。擊大夏而臣之。國都嬀水[北]。其土地與安息同俗。其餘小衆不能去者。保南山[羌]。號小月氏焉。大夏本無大君長。往往置小君長。有五翕侯。一曰未(休)密翕侯。二曰雙靡翕侯。三曰貴[霜]翕侯。四曰[肸頓]翕侯。五曰高附翕侯。

★『後漢書』大月氏國傳

大月氏國。居藍氏城。西接安息四十九日行。東去長史所居六千五百三十七里。去洛陽萬六千五百三十七里。戶十萬。口四十萬。勝兵十萬人。初月氏爲匈奴所滅。遂遷於大夏。分其國爲休密雙靡貴霜肸頓都密。凡五部翕侯。後百餘歲。貴霜翕侯丘就却攻滅四翕侯。自立爲王。國號貴霜。王侵安息。取高附地。又滅濮達罽賓。悉有其國。丘就却年八十餘死。子閻膏珍代爲王。復滅天竺。置將一人。監領之。月氏自此之後。最爲富盛。諸國稱之皆曰貴霜王。漢本其故號。言大月氏云。

參照文獻

中、和文 (五十音順)

内田吟風 一九三八A 「月氏のバクトリア遷移に關する地理的年代的考證上」(『東洋史研究』第三卷四號、一九三八年)、二九–五六頁。

内田吟風 一九三八B 「月氏のバクトリア遷移に關する地理的年代的考證下」(『東洋史研究』第三卷五號、一九三八年)、二九–五一頁。

内田吟風　一九七二A　「魏書西域傳原文考釋（下）」『東洋史研究』第三一卷三號、一九七二年、五八－七二頁。
内田吟風　一九七二B　「吐火羅國史考」『東方學會創立二十五周年記念東方學論集』（東京、山川出版社）、一九七二年、九四－九六頁。
江上波夫　一九八七　「古代西トルキスタンなどの行國と城郭國」（江上波夫編『中央アジア』『世界各國史』卷一六（東京、山川出版社）、一九八七年、二三三－二四二頁。
榎　一雄　一九九三　「漢魏時代の敦煌」（『榎一雄著作集』第五卷、東京、汲古書院、一九九三年）、一一一－一四二頁。
小谷仲男　一九六六　「バダフシャンにおける玄奘の旅行」（『東方學報』京都第三七册、一九六六年）、三八九－四一一頁。
小谷仲男　二〇一五　「敦煌懸泉漢簡に記錄された大月氏の使者」（『史窓』七二號、京都女子大學、二〇一五年）、横組一五－三七頁。
小野山節　一九六六　「クンドゥズのバラヒッサール城址發掘」（考古美術班「第四、第五次イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査豫報」、『東方學報』京都三七册、一九六六、三五九－四六六頁）、三五九－三六五。
桑原隲藏　一九三三　「張騫の遠征」（『東西交通史論叢』、京都、弘文堂、一九三三年）（『桑原隲藏全集』、第三卷、東京、岩波書店、一九八六年）、二六一－三三五頁。
桑山正進　一九八五A　「トハーリスターンにおけるエフタル、テュルクとその城邑」（『三笠宮殿下古稀記念オリエント學論集』、東京、小學館、一九八五年）、一四〇－一四五頁。
桑山正進　一九八五B　「バーミヤーン大佛成立にかかわるふたつの道」（『東方學報』京都第五七册、一九八五年）、一〇九－二〇九頁。
桑山正進　一九九〇　『カーピシー＝ガンダーラ史研究』、京都、京都大學人文科學研究所、一九九〇年。
桑山正進編　一九九八　『慧超往五天竺國傳研究』改定第二刷、京都、臨川書店、一九九八年（初版、京都大學人文科學研究所、一九九二年）。
蔀勇造譯注　二〇一五　『エリュトラー海案内記』一、『東洋文庫』八七〇、二〇一五年、東京、平凡社。
蔀勇造譯注　二〇一六　『エリュトラー海案内記』二、『東洋文庫』八七四、二〇一六年、東京、平凡社。
司馬遷撰、瀧川資言考證、水澤利忠校補　『史記會注考證附校補』、二卷、上海、上海古籍出版社、一九八五年。
白鳥庫吉　一九七〇　「西域史上の新研究」（『白鳥庫吉全集』第六卷、東京、岩波書店、一九七〇年）、五七－二二七頁。
白鳥庫吉　一九七一　「プトレマイウスにみえたる葱嶺通過路」（『白鳥庫吉全集』第七卷、東京、岩波書店、一九七一年）、一－四一頁。
羽田　亨　一九三〇　「月氏及び貴霜に就いて」（『史學雜誌』第四一卷九號、一九三〇年）（『羽田博士史學論文集』上卷 歴史篇、東京、一九五七年）、五三八－五六一頁。
村川堅太郎譯　一九四六　『エリュトゥラー海案内記』、東京、生活社、一九四六年。
山崎利男　一九九九　「カニシュカ一世の年代をめぐる新研究紹介」（中央大學『アジア史研究』、二三號、一九九九年）、二一－五六頁。
甘肅省文物考古研究所「甘肅敦煌漢代懸泉置遺址發掘簡報」（『文物』二〇〇〇年五期）、四－二〇頁。
甘肅省文物考古研究所「敦煌懸泉漢簡内容概述」（『文物』二〇〇〇年五期）、二一－四五頁。
王先謙撰『漢書補注』百卷、光緒二六（一九〇〇）年、長沙王氏刊本（『二十五史』、臺北、藝文印書館）。
王先謙撰『後漢書集解』九〇卷、『續志』三〇卷、民國四（一九一五）年、長沙王氏刊本（『二十五史』、臺北、藝文印書館）。
徐松『漢書西域傳補注』、上海、商務印書館、一九三七年（初版、一八二九年）。
餘太山　一九九〇　「大夏大月氏綜考」（『中亞學刊』卷三、北京、一九九〇

年)、一七一四六頁。
張德芳 二〇〇四「懸泉漢簡中若干西域資料考論」(榮新江、李孝聰主編『中外關係史 新資料與新問題』、北京、科學出版社、二〇〇四年)、二二九—二四五頁。
張德芳 二〇一六「河西漢簡中的大月氏」(榮新江、羅豐主編、寧夏文物考古研究所、北京大學中國古代史研究中心編『粟特人在中國：考古發現與出土文獻的新印證』下、北京／科學出版社、二〇一六年)、六三〇—六四三頁。

歐文

Adamec, Ludwig W. (ed.) *Historical and Political Gazetteer of Afghanistan* 1, *Badakhshan Province and Northeastern Afghanistan*, Graz : Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, 1972.

Bartholomew, John C. et al. (eds.) *The Times Atlas of the World, Comprehensive Edition*. 8th edition, London : Times Books, 1990.

Bosworth, C. E., Yabghu, *The Encyclopedia of Islam*, New Edition, (eds.) P. J. Bearman, Th. Bianquis, C. E. Bosworth, E. van Donzel and W. P. Heinrichs, Vol. 11, Fasc. 181-182, Leiden : Brill, 2001.

Casson, Lionel, *The Periplus Maris Erythraei : Text with Introduction, Translation, and Commentary*. Princeton : Princeton University Press, 1989.

Chavannes, Edouard, Les pays d'occident d'après le *Heou Han chou*, *Toung Pao*, serie II, vol. VIII (1907), pp. 149-234.

Chavannes, Edouard, Voyage de Song Yun dans l'Udyāna et le Gandhāra (518-522 p. c.), *Bulletin de l' Écôle française d'Extrême Orient, t.* 3, 1903, pp. 379-441.

Curzon, George, N., *The Pamirs and the Source of the Oxus*. London, 1896 (Kraus Reprint : Liechtenstein/ Nendeln, 1978).

Dehejia, Vidya, *Early Buddhist Rock Temples : A Chronological Study. Studies in Ancient Art and Archaeology*, ed. Donald Strong. London : Thames and Hudson, 1972.

Errington, Elizabeth and Joe Cribb, Numismatic Perspectives on Chronology in the Crossroads of Asia. *Gandhāran Art in Context. East-West Exchanges at the Crossroads of Asia*, edited by Raymond Allchin, Bridget Allchin, Neil Kreitman and Elizabeth Errington. Cambridge : The Ancient India and Iran Trust, 1997, pp. 216-230.

Falk, Harry, The *yuga* of Sphujiddhvaja and the Era of the Kuṣāṇas. *Silkroad Art and Archaeology*, vii (2001), pp. 121-136.

Falk, Harry, *Hariśyenalekhapañcāśikā. Fifty Selected Papers on Indian Epigraphy and Chronology,* selected and prepared for publication with indices by Britta Schneider and Ingo Strauch in collaboration with Caren Dreyer and Andrea Schlosser. Bremen : Hempen Verlag, 2013.

Falk, Harry, ed. *Kushan Histories : Literary Sources and Selected Papers from a Symposium at Berlin, December 5 to 7, 2013*. Bremen : Hempen Verlag, 2015.

Fulsewé, A. F. P., *Chinese in Central Asia. The Early Stage : 125 B. C. -A. D. 23. An Annotated Translation of Chapters 61 and 96 of the History of the Former Han Dynasty with an Introduction by M. A. N. Loewe*. Leiden : E. J. Brill, 1979.

Fussman, Gérard, Une étape decisive dans l'étude des monnaies kouchanes. *Revue Numismatique*, 6e série, XXVIII, 1986, pp. 145-173. (A Decisive Stage in the Study of Kushana Coinage. *Numismatic Digest*, Vol. 14, 1990, pp. 73-101.)

Fussman, Gérard, L'inscription de Rabatak et l'origine de l'ére śaka. *Journal Asiatique,* t. 286, no. 2, 1998, pp. 571-651.

Fussman, Gérard, The Riddle of the Ancient Indian Eras is Not Yet Solved. *Ancient India : Bulletin of the Archaeological Survey of India*, New

Series, No. 1, New Delhi : The Director General, Archaeological Survey of India, 2001, pp. 239–259.

Grenet, Franz, Nouvelles données sur la localisation des cinq *yaβγus* des Yuezhi. L'arrière-plan politique de l'itinéraire des Marchands de Maes Titianos. *Journal Asiatique,* t. 294, no. 2, 2006, pp. 325–341.

Haneda, Akira, A propos des Ta Yue-tche et des Kouei-chouang. *Bulletin de la Maison franco-japonaise*, t. IV, 1933, pp. 31–56. (*Recuil de Oeuvres posthumes de Toru Haneda*, Vol. II, Kyoto : Dobosha Imprimerie, 1975.)

Huḍūḍ al-'Ālam, The Regions of the World, A Persian Geography 372 A. H. - 982 A. D., translated and explained by V. Minorsky, with the preface by V. V. Barthold, 2nd edition edited by C. E. Bosworth, London : Messrs. Luza & Company, 1970.

Humbach, Hermut, *Baktrische Sprachdenkmäler.* Wiesbaden : Otto Harrassowitz, 1966.

Huntingford, G. W. B., *The Periplus of the Erythraean Sea by an unknown author, with some Extracts from Agatharkhides, On the Erythraean Sea*, London : The Hakluyt Society, 1980.

Konow, Sten, *Kharoṣṭhi Inscriptions with the Exception of those of Aśoka. Corpus Inscriptionum Indicarum*, Vol. II, Part I, Calcutta : Government of India, Central Publication Branch, 1927.

Kuwayama, S., Literary Evidence for Dating the Colossi in Bamiyan. *Orientalia : Iosephi Tucci Memoriae Dicata*, ed. Gnoli, G. and L. Lanciotti. *Serie Orientale Roma*, Vol. 57, 2. Roma : Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1987, pp. 703–727.

Kuwayama, S., Pilgrimage Route Changes and the Decline of Gandhāra. *Gandhāran Buddhism : Achaeology, Art, Texts,* ed. Pia Brancaccio and Kurt Behrendt. *Asian Religions and Society Series.* Vancouver and Toronto : UBC Press, pp. 107–134.

Lamberg-Karlovsky, C. C., Trade Mechanisms in Indus-Mesopotamian Interrelations. *Journal of the American Oriental Society,* Vol. 92-1, 1972, pp. 222–229.

Mac Dowall, David W., Numismatic Evidence for a Chronological Framework. *On the Cusp of an Era. Art in the Pre-Kušana World*, ed. Doris Meth Srinivasan, Leiden/Boston : Brill, 2007, pp. 95–117.

Mac Dowall, David W., Framework for Pre-Kusan Art, from Khalchayan to Gandhara. *On the Cusp of an Era, Art in the Pre-Kusana World.* Leiden : Brill, 2007, pp. 95–117.

Marquart, Josef, *Ērānšahr nach der Geographie des Ps. Moses Xorenac'i. Mit historisch-kritischen Kommentar und historischen und topographischen Excursen.* Berlin : Weidmannsche Buchhandlung, 1901.

Marshall, Sir John, The Date of Kanishka, *Journal of Royal Asiatic Society*, 1914, pp. 973–986.

Pelliot, P., Tokharien et koutchéen, *Journal Asiatique,* t. 22. 1934, pp. 38–40.

Pulleyblank. E. G., The Consonantal System of Old Chinese. *Asia Major*, New Series, Vol. 9, 1962. Part 1, pp. 58–144 and Part 2, pp. 206–265.

Rapson, E. J. (e.) *The Cambridge History of India.* Vol. 1 : *Ancient India.* Cambridge : the University Press, 1922.

Senior, R. C., *From Gondophares to Kanishka.* Private Edition, 1997.

Sims-Williams, N. and Cribb, Joe, A New Inscription of Kanishka the Great : Part I : The Robatak Inscription, Text and Commentary by N. Sims-Williams, pp. 75–96 ; Part II, The Rabatak Inscription, its Historical Implications and Numismatic Context by Joe Cribb, pp. 97–127. *Silk Road Art and Archaeology* Vol. 4, 1995–1996, pp. 75–142.

Sims-Williams, N., Ancient Afghanistan and its invaders : Linguistic evidence from the Bactrian documents and inscriptions, *Indo-Iranian*

Languages and Peoples. Proceedings of the British Academy 16, ed. Nicholas Sims-Williams. Oxford : the University Press, pp. 225-242.

Sims-Williams, N., Further Notes on the Bactrian Inscription of Robatak with an Appendix on the Names of Kujula Kadphises and Wima Taktu in Chinese. *Proceedings of the Third European Conference of Iranian Studies held in Cambridge, 11th-15th September 1995,* Part 1 : *Old and Middle Iranian Studies*, ed. N. Sims-Williams. Wiesbaden, 1998, pp. 79-92.

Smith, Vincent A., *The Early History of India from 600 B. C. to the Muhammadan Conquest including the Invasion of Alexander the Great*, Fourth Edition, revised by S. M. Edwardes, Oxford : the Clarendon Press, 1924 (Reprinted lithographically at the University Press, Oxford, from sheets of the Fourth Edition 1957).

Stein, Mark Aurel, *Ancient Khotan*. Oxford : the Clarendon Press, 1907.

Thierry, François, Yuezhi et Kouchans : Pièges et dangers des sources chinoises. *Afghanistan : Ancien carrefour entre l'est et l'ouest. Actes du colloque international organisé par Christian Landes et Osmund Bopearachchi au Musée archéologique Henri-Prades-Lattes du 5 au 7 mai 2003*, ed. Osmund Bopearachchi et Marie-Françoise Boussac, Turnhout : Brepols, 2005, pp. 421-539.

Torday, Laszlo, *Mounted Archers : The Beginning of Central Asian History*. Durham : The Durham Academic Press, 1997.

Van Lohuizen-de Leeuw, J. E., *The Scythian Period : An Approach to the History, Art, Epigraphy and Palaeography of North India from the 1st century B.C. to the 3rd Century A.D.* Leiden : E. J. Brill, 1949.

The World Atlas (Atlas Mīra). 2nd edition, Moscow, 1967.

Wheeler, Sir Mortimer, *Rome beyond the Imperial Frontier*, London : G. Bell and Sons, Ltd, 1954.

Zürcher, E., The Yueh-chih and Kaniṣka in Chinese Sources, *Papers on the Date of Kaniṣka submitted to the Conference on the Date of Kaniṣka, London, 20-22 April, 1960*, ed. A. L. Basham, Leiden : E. J. Brill, 1968, pp. 346-39.